

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.260

2015年1月

平成27年 濱口総長年頭あいさつ「新年を迎えて」



撮影：Alexander Mahmoud
©Nobel Media AB

目次

●年頭あいさつ	
平成27年 新年を迎えて	3
●ニュース	
赤崎 勇本学特別教授及び天野 浩工学研究科教授が2014年ノーベル賞授賞式に出席	8
名古屋大学レクチャー2014を開催	12
全学同窓会講演会及び夕食会を開催	13
古川美術館へ「さざれ石」を贈呈	13
永年勤続者表彰式を開催	14
シュトイデカルテットレクチャーコンサートを開催	14
成均館大学との共同シンポジウムの開催	15
駐日南アフリカ大使による講演会を開催	15
日本留学フェア2014を開催	16
ラジャマンガラ工科大学タンヤブリ校と学術交流協定を締結	16
第3回石田賞授賞式を挙行	17
大学文書資料室がシンポジウムを開催	17
國枝理事が大学付属高等研究院国際連盟の総会において基調講演	18
リーディング大学院プログラム合同シンポジウムを開催	18
平成26年度名古屋大学コンベンション開催支援セミナーを開催	19
赤崎 勇本学特別教授、巽 和行特任教授が日本学士院新会員として選定される	19
●知の先端	
有機薄膜デバイスのスピン計測	20
黒田 新一（大学院工学研究科教授）	
●知の未来へ	
「評価されたい」との付き合い方	22
江夏 幾多郎（経済学研究科准教授）	
●部局ニュース	
大学院多元数理科学研究科設立20周年記念行事を開催	23
第4回名古屋大学社会イノベーションデザイン学センターシンポジウムを開催	23
第19回博物館特別展「絹谷幸太 創知彫刻」を開催	24
発達障害に関わる専門家のための講演会を開催	24
ICCAE 第6回オープンセミナーを開催	25
減災館第2回特別企画展「資料からよみとく濃尾地震」を開催	25
発達障害児支援及び特別支援教育に関する国際会議を開催	26
第16回まちとすまいの集いを開催	26
第34回トークサロン「ふみよむゆふべ」を開催	26
和式馬術供覧を開催	27
ひらめき☆ときめきサイエンスを開催	27
第105回防災アカデミーを開催	27
●受章者一覧	28
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成26年11月16日～12月15日	33
●イベントカレンダー	37
●ちょっと名大史	
1989年の名古屋大学 — 青色 LED が実現した年 —	40

平成27年 新年を迎えて
 —「不屈」、「貢献」、「挑戦」の心を、
 未来へつなぐ—





名古屋大学

総長 濱口 道成

謹んで新年のお慶びを申し上げます。名古屋大学全学同窓会の皆様、教職員の皆様、大学院生・学生の皆様、そして名古屋大学をご支援いただいた多くの皆様、日本各地で、そして世界の各地で、新年をお迎えされたことと、お慶び申し上げます。皆様にとって、今年も明るく実りの多い一年となりますよう、心よりお祈り致します。

さて、昨年は本学にとって画期的なニュースがありました。皆様もご存知のように、赤崎 勇先生と天野 浩先生が、青色発光ダイオード（LED）の発明でノーベル物理学賞を受賞された事です。この発明は、20世紀中には実現不可能とされていた技術ですが、先生方の超人的な研究により実現しました。もしこの発明がなければ、スマートフォンやノートパソコンは今のような薄型を実現していな

かったでしょう。更に重要なことは、この発明が、エネルギー消費全体に大きな影響を与えた事です。青色LEDにより白色LEDが開発され、白色LEDは電気を効率的に光に転換するため、従来の電球に比して、10倍の寿命と6倍の効率を持つLED電球が実現されました。LEDの普及により2020年には、日本の電気総需要の7%を削減でき、その効果は原子力発電所10数基に相当すると言えます。また、LEDは、低い電圧でも十分な光をもたらすことから、小規模の電源でも光源として機能します。その結果、LEDはアフリカや中央アジアなどの15億人の人々に光をもたらした発明とされています。まさに青色LEDは、21世紀の人間社会の在り方を根底から変える技術の1つ、エジソンの電球以来の発明となったと言えます。

更に、この発明で忘れてはならないことは、極めて早い



ノーベル賞発表記者会見



総長と天野教授の安倍総理表敬訪問



秋季入学式



「ウェルビーイング in アジア」実現のための女性リーダー育成プログラム入講式

段階から豊田合成株式会社との産学連携があったことで、そのおかげで、数百にわたる特許が実現し、実用化が現実的な作業として進められました。特に初期段階において、「20世紀には不可能」とされた研究であるが故に、研究費は決して潤沢ではなく、研究の財源は厳しいものがあつたと推察します。その状況の中で、豊田合成株式会社の深い信頼と支援があつた事が、困難を克服可能なものと導くものであつたと、私は思います。産学連携の理想形を見る思いです。また、私に感動をもたらすことは、この発明が赤崎先生の卓越した指導の下で、本学のキャンパスで、様々な困難を越え、多くの関係者と共に、実現したことです。学内には、この感動を共通の体験にする多数の人材がいます。これらの方々の実感、本学の研究をさらなる高みへと導く力となるでしょう。

さて、お二人の受賞によって、本学関係者でノーベル賞を受賞された方々は6名となりました。2001年の野依良治先生の化学賞、2008年の益川敏英先生・小林 誠先生の物理学賞と下村 脩先生の化学賞、そして今回のお二人です。このうち野依先生を除く5名の方々が、本学の博士号を取得されており、研究者としてスタートを本学で始められています。6名の方々の受賞は、先生方の類い稀な才能の結果としての受賞ではありますが、比類なき才能が開花する背景に、本学の自由闊達な学風があつたと私は考えます。

今回の受賞を契機に、様々なマスコミ関係者や研究者の方々から、なぜノーベル賞受賞者が名大で続くのかと取材が相次いでいます。この問いに対して、確かにそれなりの「続く」理由があります。まず、共通点として挙げられることは、「師弟」の存在です。野依、下村先生には平田義正先生の存在が、益川、小林先生には坂田昌一先生の存在がありました。もちろん、赤崎先生と天野先生は、天野先生が学部生の時からの師弟関係にあります。師弟関

係というといささか古めかしい響きを持ちますが、この東洋的な深い関係こそが、不可能とも思える課題を越える力を与えたと思います。師の持つ俯瞰的視点、深い知識、指導力と若い研究者の持つ困難をものともしない突破力が、強い信頼関係の下につながった時、革新的な成果が生まれたと言えます。

2つ目の重要な点は、「自由闊達」にあります。坂田先生は、常々「学問の前に人は平等である」と話しておられました。その関係があるが故に、真実は何かについて、率直な議論が成立したと言えます。また、師弟の間に冷静にして深く、長い信頼が生まれたと言えます。更に忘れてならないことは、師の間に共通する価値観として、死線を越えて戦後の日本を作り上げてきた人だけが持つ思いがあることです。生きることの意味と喜びを深く理解する体験があつたからこそ、腹を据えて弟子の成長を見守ることができたのでしょう。私たちは今、戦後日本が実現できた自由と平等の意味を改めて感動を持って見つめなおすべき時にあると思います。

さて、3点目は、何かと問えば、それは「若い研究者の自立」にあります。6名の革新的な研究の核になった仕事は、赤崎先生を唯一の例外として、すべて34歳までに生まれています。天野先生の場合、最初の転換点となる窒化ガリウム結晶化の成功は、24歳の時でした。そこに至るまで、彼は1,500回を超える失敗を繰り返したとのこと。そして同時に、繰り返し失敗を続けても、天野先生を指導し続ける赤崎先生の姿がありました。天野先生は、赤崎先生の下にいたから、研究にのめり込むことができたと話しています。青年天野が、天才へと変貌していく過程がそこにはありました。ノーベル賞が生まれる背景には、名大の場合、若者に思う存分、「研究にのめり込ませる指導」そして事実をありのままに受け止める指導があつたことは確かです。

昨今、論文のコピペ、データの改ざんが相次ぎ、科学者



シュトイデカルテットレクチャーコンサート

コミュニティへ多くの問題を投げかけています。私には、これら改ざんの背景に、強圧的に「画期的成果」を求める師の姿が、垣間見えます。期限付きの雇用の中で短期的に成果を出さざるを得ない若手研究者の姿も浮かび上がります。これらの不祥事が繰り返される背景に、健全な師弟関係の崩壊と若い研究者の自立が尊重されない状況があると、私は思います。そしてまた、5年程度の短期間で巨額の資金を投資し、成果を求められる研究支援の在り方のもたらす影響も見え隠れしています。今我々科学者は、真実の前に平等の議論を交わす師弟関係の樹立、そしてそれを実現する学術支援のあるべき姿を求めなくてはならない時代を迎えているのではないかと考えます。今後、果たして日本は、ノーベル賞級の研究、人類の未来に希望をもたらす成果を輩出し続けられるかどうか。その答えは、深い信頼に基づく師弟関係の樹立と若手研究者の自立の中にあります。昨年は、科学と真実について、改めて深く考える年でした。科学技術・学術審議会の人材委員会座長として、改めて国の政策の中へこれらの視点を入れていくことが、私の責任であると思います。

さて、私の総長として任期もあと3カ月となりました。この6年間、様々な形で皆様にご支援をいただきました。改めて、この場をお借りし、深く御礼申し上げます。総長就任時に「濱口プラン～名古屋大学から Nagoya University へ」を掲げ、名古屋大学の国際化を図ってまいりました。何故、国際化か。その所以の1つは、多くの画期的研究成果と人材育成を成し遂げてきた本学の歴史を、今日的な価値観の中で継承発展させたいとの思いからであります。かつて、焦土の中で生きがい求め彷徨した若者にとって、自由と平等は感動的な意味を持っていました。しかし残念ながら今日、自由・平等はあまりにも自然な価値となり、若者に生き方を根底から問いかける契機とはな



総長が「北極星勲章」を授与

りえません。他方、高度文明社会を実現した日本は、失敗を何よりも恐れる無菌空間となっています。そしてまた、孤立を恐れるが故に、個性の表現を本能的に回避する、「野性」を失った若者の姿が見えます。戦後の混沌の中にあつた、失敗を恐れず挑戦する若者の姿を今求めるとすれば、それは大学の国際化を徹底して図り、「多様な価値と文化」を実感として若者に体験させる環境の中に答えがあると、私は考えてきました。

6年間、毎年の入学式で学生諸君に、「下宿しなさい。下宿できないなら、海外へ留学しなさい。」と訴えてきました。その結果、5年間で海外へ出かける名大生は4倍以上となり、年間で600名を越すようになりました。この数を1,000名にするのが今私の夢です。また、4年前にG30プログラムで、秋入学、英語による授業を開始しましたが、今では7倍を超える倍率（学部入試における出願者に対する入学者の割合）で、英語の講義も500（学部、大学院合計）を超える授業科目が提供されUCLAレベルの学生が入学しています。研究の強化についても組織的に支援した結果、今年度は過去最高の競争的外部資金の獲得になり、平成25年度の科研費の獲得件数も教員1人あたりではすべての大学・研究所で1番となりました。任期当初から始めた若手研究者育成のための若手育成プログラム（YLC）では50名近い若手研究者を育てることができ、彼らの力を借りつつ、東大に次いで多いリーディング大学院6プログラムを充実できました。産学連携についても、新しい形を求め小宮山前東京大学総長とともに始めたCOI（Center of Innovation）プログラムでは、私も総括ビジョナリーリーダーを担当しており、全国で12拠点が昨年度よりスタートしております。本学では、高齢化社会におけるモビリティの在り方をトヨタ自動車株式会社、株式会社東芝等と共同研究し始めています。今、外部の様々な分野の方々から「名古屋大学は元気ですね」と評価を受けるまでにな



講演を行うピスワン ASEAN 前事務総長



講演を行うモクタン ASEAN 事務次長

りました。

ところで、「多様な価値」を導入する目的で、近年力を入れてきたものに、芸術があります。博物館前の彫刻を見ていただけたでしょうか。昨年から、名古屋ウィーンクラブのご支援をいただき、ウィーンフィルのコンサートマスターを招請し、学生指導と演奏会を行っています。11月には、ダイドー株式会社のご支援をいただき、世界トップレベルのシュトイデカルテットの演奏会を行い、日頃神経をすり減らしておられる教職員に、良質の芸術を実感していただきました。昨年より、名古屋大学レクチャーも、ピアノ演奏で締めくくっています。COIプログラムの一部として、社会イノベーションデザイン学センターが発足し、活動の一環として東京芸術大学と連携しています。愛知県立芸術大学の若手を招いての演奏会も、定期化してまいりました。「芸術と科学はその求める心において同一」であり、「高い精神性を持った科学は、良質の文化の下に生まれる」、と私は考えます。

国際化について、今年度は、新たにアジアサテライトキャンパス学院を設置し、モンゴル、ベトナム、カンボジアにまずサテライトキャンパスを開設しました。来年度以降、

ラオス、ウズベキスタン、ミャンマー、インドネシアと計7カ国に開設予定です。このプログラムは、日本の大学としては初めての試みであり、法学、医療行政、開発行政、農業の分野で各国政府の中核で活動しておられる方に、在職のまま社会人入学により、博士号の取得を目指してもらうものです。年1度は本邦キャンパスでスクーリングを行うほか、現地キャンパスでは日常的な指導を行います。近未来には、50名規模の大臣・副大臣級の人材を育成し、本学をハブとしてアジアにアカデミックネットワークを形成していこうとするものです。10月のモンゴルでの開所式には私も参加し、モンゴル国の最高位勲章「北極星勲章」を授与いただきました。これまでの本学全体の活動に対する高い評価をいただいたものと感謝を持って拝受致しました。

2015年には、ASEAN 共同体がスタートし、総人口7億を超える貿易圏が誕生します。アジアサテライトキャンパスはこの流れと平そくを合わせたものでもあります。昨年2月には、ASEAN 統合に関する連続国際シンポジウムを開催し、スリン・ピスワン前 ASEAN 事務総長にも特別講演をいただきました。また、2度にわたり、A.K.P. モクタン ASEAN 事務次長にも来学、講演をいた



アジアサテライトキャンパス学院設置



カンボジアサテライトキャンパステープカット



アデレード大学、フライブルク大学との調印式



ノーベル賞授賞式前の記念撮影

だき、ASEAN 事務局との連携を深めています。

昨年、地球温暖化の故か、気候の激しさをとりわけ感じる年でありました。12月の大雪の日に、14番目の同窓会海外支部を立ち上げるためフィリピンに出かけました。今回の同窓会は、名誉教授の斎藤哲夫先生に強力にご支援をいただき、また、全学同窓会長の豊田章一郎様ご夫妻にご出席いただき、最高の支部立ち上げとなりました。同窓会と合わせ、ASEAN 全体の農業指導をしている SEARCA や世界最高の稲研究所である国際稲研究所 (IRRI) も訪れてきました。IRRI は、126,000種の種もみを保存しており、地平線まで続く広大なほ場で塩害や、乾燥、水害に強い稲を育てています。世界の代表的な稲作地帯はすべてデルタ地帯にあり、地球温暖化により深刻な被害が予想されます。彼らは、「持続可能な発展を実現する科学技術とは何か」の問いについて、我々のはるか先を進みながら、未来を見据えて研究を進めています。頭が下がるとともに、日本は様々な点で ASEAN 諸国から学ぶ時代を迎えていることを実感しました。この研究所は、フィリピン政府及びフォード財団、ロックフェラー財団が作ったもので、近年はビル・ゲイツ氏が強力に支援しています。我々も、SEARCA で育ったフィリピン人研究者を名古屋大学教員として迎え、カンボジアのサテライトキャンパスで指導をお願いしています。今後さらに連携を深める可能性を実感しつつ、帰国しました。

今年度、本学の国際化として、アジアに焦点を当てたアジアサテライトキャンパスと共に、欧米に焦点を当てたジョイントディグリー制を、フライブルク大学、アデレード大学との間で開始します。このプログラムでは、相互の大学院博士課程在学者が提携先の大学で1年以上の研究歴を積み、2大学共同の博士号取得が可能となります。もちろん、プログラムは詳細に設計されており、新聞紙上等でも取り上げられているとおりの日本の博士号に疑念が持

たれている現状の中で、国際的な保証を得るものでもあります。フライブルク大学長とは、幅広い分野で進めることを合意し、今後複数の分野で展開を図ることを願っています。また9月には、ケンブリッジ大学セント・ジョーンズ校、エジンバラ大学とも交流協定を結びました。セント・ジョーンズ校は500年の歴史の中で、日本の大学と交流協定を結ぶのは初めてであるとの事で、名古屋大学が英国からも見える存在となっていることを実感しています。これらの活動の結果、9月には文部科学省「スーパーグローバル創成支援」タイプA・トップ型に採択にされ、今後9年にわたり支援を受けることとなりました。

さて12月には、私もノーベル賞授賞式に参列させていただきました。授賞式はただただ圧倒的でありましたが、受賞記念講演会はとりわけ深く心に残るものでありました。赤崎先生は、窒化ガリウムによる青色LED開発の半世紀余にわたる歴史に触れられ、その困難と意義を極めて学術的に、明快に述べられました。天野先生は、若い世代へのメッセージを述べられ、困難に挑戦することの意義を感動とともに語られました。お二人が、それぞれの研究を振り返り挙げられた言葉として、赤崎先生は「不屈」を、天野先生は社会への「貢献」を、そして中村修二先生は「挑戦」を挙げておられました。これらの言葉は、研究を志す全ての若い世代へ必ず引き継ぐべき言葉と考えます。

授賞式で1歩1歩踏みしめつつ歩かれる赤崎先生のお姿、講演会での顔を拝見し、戦後の荒廃の中から勇気をもって未来を切り開いてきた日本人の姿を拝む思いがこみ上げ、胸が熱くなりました。今は亡き私の恩師松本利貞先生の温顔を思いつつ、「恩師ありて、今日あり」と新年を迎えております。本年も、ご指導をいただきますようお願い致しますとともに、松尾清一次期総長にも変わらぬご支援をいただければ幸いですようお願い致します。

赤崎 勇本学特別教授及び天野 浩工学研究科教授が 2014年ノーベル賞授賞式に出席



授賞式会場の様子
撮影：Niklas Elmehed
©Nobel Media AB



赤崎特別教授

撮影：Alexander Mahmoud
©Nobel Media AB



天野教授

撮影：Alexander Mahmoud
©Nobel Media AB

赤崎 勇本学特別教授及び天野 浩工学研究科教授が、12月10日(水)、スウェーデンのストックホルムで挙行された2014年ノーベル賞授賞式に出席しました。今年の物理学賞は、赤崎特別教授、天野教授、中村修二カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授の3名の共同受賞で、『明るく省エネルギーの白色光源を可能にした高効率の青色発光ダイオード(LED)の発明』を受賞理由として10月7日に発表されました。

授賞式へは本学から濱口総長、松下工学研究科長、本田善央工学研究科准教授、三枝国際部長らが天野教授のゲストとして出席しました。

10日の授賞式が行われる1週間(12月6日から12日)はノーベルウィークと呼ばれ、連日、記念講演(ノーベルレクチャー)などノーベル財団が主催する様々な行事が行われます。これらの行事へ出席するため、天野教授は、12

月5日(金)、中部国際空港(セントレア)からストックホルムへ向け出発しました。出国時には、天野教授夫人、太田光一豊田合成株式会社顧問同席のもと、セントレアにおいて記者会見が行われました。会見では、天野教授から、ノーベルレクチャーでは若い年代の研究者たちに向けたメッセージを伝えたいとの意気込みが述べられました。

また、6日未明には、赤崎特別教授が羽田空港からストックホルムへ向けて出発しました。出発前に行われた記者会見では、赤崎特別教授から、ノーベルレクチャーではこれまで研究に協力いただいた方への感謝を伝えたい旨が述べられました。

【12月6日】

受賞者懇談会が開催され、天野教授はノーベル博物館を訪れました。天野教授は受賞に関連した自身の研究にゆか



出国時の天野教授（12月5日）



スウェーデンの学生と交流する天野教授（12月9日）



ノーベル博物館カフェの椅子にサインをする天野教授（12月6日）



受賞者3名の共同記者会見での記念撮影
（左から、中村教授、赤崎特別教授、天野教授）（12月8日）

りのある品として、青色LEDの開発に使用した窒化ガリウムの結晶化装置の部品や、LEDの紫外線照射装置を寄贈しました。また、博物館を訪れた受賞者の間では恒例となっている博物館内にあるカフェの椅子の裏へのサインを行いました。

【12月7日】

スウェーデンの王立科学アカデミーにおいて受賞者共同記者会見が行われ、天野教授は、ノーベル物理学賞を共同受賞する中村修二氏ら他のノーベル賞受賞者と共に会見に出席しました。記者会見終了後には、翌日のノーベルレクチャーの会場となるストックホルム大学においてレクチャーのリハーサルが行われました。

また、同日には、授賞式等の行事に出席するため、総長一行がセントレアからストックホルムに向けて出発しました。

【12月8日】

ストックホルム大学においてノーベルレクチャーが行われました。レクチャーには、現地の学生ら約1,000名の聴衆が訪れ、赤崎特別教授、天野教授の親族や関係者、前日から現地に到着した総長一行も出席しました。

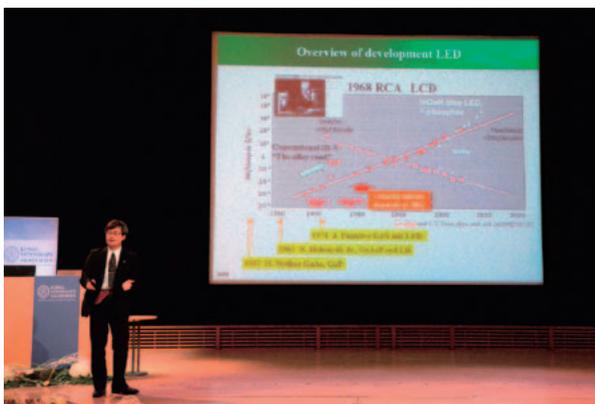
赤崎特別教授は「青い光に魅せられて」と題して、高品質 GaN 結晶の作成、Pn 接合 GaN 系青色 LED の実現に至るまでの道のりについて、また、ともに研究に取り組んできた方々への感謝が述べられました。引き続き、天野教授からは、低温バッファ層と P 型窒化ガリウムの実現についての講演が行われました。講演の中では、受賞のきっかけとなった研究は自身が学生時代に取り組んでいたものであったことなどを取り挙げ、レクチャーに参加した学生など若者へ向けたメッセージを述べました。発表後には、会場全体から赤崎特別教授、天野教授、中村教授の3名へ盛



メダル、賞状を授与される赤崎特別教授 撮影：Alexander Mahmoud ©Nobel Media AB



講演を行う赤崎特別教授（12月8日）



講演を行う天野教授（12月8日）



グスタフ国王と握手を交わす天野教授

撮影：Niklas Elmehed ©Nobel Media AB

大な拍手が送られました。

レクチャー終了後には共同記者会見が行われ、10月の受賞発表後はじめて、受賞者3名が揃っての会見となりました。

【12月9日】

スウェーデン王立工科大学を訪問した天野教授は、現地の学生たちと交流を深めました。

夕方には、赤崎特別教授、天野教授はともにノーベル博物館を訪問しました。当初は赤崎特別教授のみの訪問予定でしたが、6日に訪問を済ませていた天野教授も同行し、師弟での訪問となりました。赤崎特別教授も恒例である博物館にあるカフェの椅子の裏へのサインを行い、ノーベル博物館への寄贈の品として、MIS型と呼ばれる青色LEDなどの装置5点を贈りました。

【12月10日】

16時30分からストックホルムコンサートホールにおいて、ノーベルウィークのメインイベントである授賞式が挙行されました。授賞式では、物理学賞選考委員会から、今回の物理学賞は、青色LEDの発明により文字どおり世界を明るく照らしたことが、人類に多大な利益をもたらした者に物理学賞を贈るといふ、ノーベル氏の遺志を完全に満たしていることが述べられました。その後、赤崎特別教授、天野教授の順にスウェーデンのカル16世グスタフ国王からメダルと賞状が手渡されました。

授賞式終了後には、ノーベル財団主催の晩餐会がストックホルム市庁舎「青の間」で開かれました。晩餐会では天野教授の左隣りにスウェーデンのシルビア王妃が座られ、天野教授は時折、笑顔をみせながらシルビア王妃との談笑を楽しみました。



ノーベル博物館での記念撮影（12月9日）



帰国時に総長から花束を受け取る天野教授（12月16日）



赤崎特別教授の帰国記者会見の様子（12月12日）



天野教授の帰国記者会見の様子（12月16日）

【12月11日、12日】

天野教授は、11日、スウェーデンのテレビ番組「Nobel Minds」の収録を行い、夜には、スウェーデンのカール16世グスタフ国王主催による晩餐会へ出席しました。また12日には、スウェーデン王立工科大学においてスウェーデンエネルギー庁セミナーに出席後、Norra Real高等学校を訪問しました。その後、夕方からはノーベルウィーク最後の行事となるノーベル財団主催による閉会レセプションに出席しました。

また日本時間の12日夕方には、赤崎特別教授が帰国し、羽田空港において記者会見が行われました。会見では、ノーベル賞受賞メダルが披露されるとともに、赤崎特別教授からはノーベルウィークを振り返り、ノーベルレクチャー後の大きな拍手に感激したなどの感想が述べられました。

【12月13日～16日】

ノーベルウィークの一連の行事終了後、天野教授は13日にはウプサラ大学、15日には Lund 大学とスウェーデン国内の大学を訪問し、講演等を行いました。各大学では、多くの現地学生、日本人留学生に迎えられ、学生たちと交流しました。

15日午後には現地を発ち、16日午前には帰国しました。到着ロビーでは、総長、荒島 正豊田合成株式会社社長が迎え、花束の贈呈が行われました。引き続きセントレアにおいて行われた帰国記者会見では、ノーベル賞受賞メダル、賞状が披露されました。天野教授はノーベルウィークを振り返り、ストックホルムにおいて国を挙げて今回の受賞を祝ってもらったことへの感謝とともに、現地での出来事に対して、夢のような1週間だったと感想が述べられました。

名古屋大学レクチャー2014を開催



講演を行う永井名誉教授



講演を行う水田名誉教授

名古屋大学レクチャー2014「人類生存のための科学と精神－感染症への挑戦と基本的人権のために－」が、12月6日(土)、豊田講堂において開催されました。本レクチャーは、世界的に著名な研究者の講演を広く一般市民に公開し、世界最高レベルの「知」に触れてもらうために行われるものです。講演者には、「名古屋大学レクチャー」の称号の授与ならびに表彰楯の贈呈が行われます。

今回は、ウイルス学研究の第一人者であり理化学研究所新興・再興感染症研究ネットワーク推進センター長を務める永井美之本学名誉教授と、現在も社会思想史学研究の先頭を走り続け、日本学士院会員でもある水田 洋本学名誉教授の2名が講演を行いました。

当日は、濱口総長のあいさつで幕をあげ、「永井博士とウイルス学」と題して、ウイルス学の基礎や恩師である永井名誉教授の研究軌跡について、分かりやすく解説がされました。

続いて、永井名誉教授が、「病原体としてのウイルス、先端医療の道具としてのウイルス、感染症研究の国際連携」と題し、「ウイルス病原性の強弱は、宿主細胞のプロテアーゼの種類に依存する」の大発見について、熱く講演

しました。また、熾烈な世界競争の中、永井名誉教授はセンダイウイルスのリバースジェネティクスをいち早く確立し、iPS細胞作成やエイズワクチン等への臨床応用が進んでいることを紹介しました。さらに、新型インフルエンザやエボラ出血熱等のウイルス感染症が、我々の命を脅かしている中、永井名誉教授が推進・指導している国際研究ネットワークが、感染症の制圧や侵入リスクの低減をめざし、活動していることについて講演しました。最後に、「若者よ、乞われたら『川の流れるように』、あるいは『自ら求めて』動こう」と若い世代にエールを送りました。

その後、安藤高等研究院長から、「水田 洋：『終わらない20世紀』を歩む思想」と題して講演があり、「社会思想史学」という学問の確立に尽力した、恩師である水田名誉教授の学問と人生を回顧しながら、水田名誉教授の精神の軌跡を明らかにしました。

引き続き、水田名誉教授から、「近代人の自立－基本的人権のために」と題して、これまでの研究成果をベースとしながら、近代思想の主流及び社会思想史の課題と対象について講演が行われました。水田名誉教授は自身の思想的成長にも触れながら、近代社会思想史の基本線として、トマス・ホップズ、アダム・スミス、ジョン・スチュアート・ミル及びカール・マルクスの思想展開について、分かりやすく講演しました。

次に、佐野附属図書館長が、水田文庫貴重書目録の刊行を記念して、水田名誉教授に目録を贈呈しました。その後、安藤高等研究院長による閉会のあいさつがあり、大盛況のうちにレクチャーが終了しました。

最後に、枝川明敬東京芸術大学教授の司会のもと、世界的に有名なピアニストの渡邊健二東京芸術大学理事によるピアノ演奏会を行いました。シューベルト、ショパン、ベートーベン等の曲が披露され、気品あふれる音色と聴く人を圧倒する演奏で聴衆を魅了しました。本学教職員、一般市民等約800名の参加があり、熱気溢れる講演会となりました。



表彰楯贈呈後の記念撮影

全学同窓会講演会及び夕食会を開催

全学同窓会講演会及び夕食会が、11月26日(水)、理学南館坂田・平田ホール及びグリーンサロン東山において開催されました。本講演会は、一般社団法人学士会との共催により全学同窓会初の試みとして、学士会で理事を務める丹羽宇一郎全学同窓会副会長を講師に招き行われました。

講演会には、濱口総長、理事等役員をはじめとする学内



講演を行う丹羽全学同窓会副会長

構成員のほか、全学同窓会の柴田副会長や岡田副会長をはじめとする卒業生や一般市民ら約140名が参加しました。参加者の中には若手の教員や学生の姿もあり、多様な人達が参加した講演会になりました。

丹羽副会長からは「グローバリゼーションと日本の将来」という講演題目で、中華人民共和国駐劔特命全権大使在任時に、中国全土に出向いた時のことや、最近の中国の政治情勢や経済情勢及び関連した日本の将来について講演が行われました。随所で、スライド資料の中には重要な数字を何も見ずに正確に発言し、非常に高度で、かつ、新聞などのマスコミからは得られない貴重な情報を多く含んだ講演会となりました。

講演会終了後、グリーンサロン東山に場所を移して、夕食会を開催しました。この夕食会には、全学同窓会と学士会の会員に限定した43名が出席し、着席バイキング方式により行われました。大変和やかでよい夕食会であったという感想が多く参加者から寄せられました。

古川美術館へ「さざれ石」を贈呈

古川美術館への「さざれ石」の贈呈及び除幕式が11月18日(火)、古川美術館分館の為三郎記念館庭園において行われました。これは古川記念館(旧古川図書館)の建設50周年を記念して行われたものです。古川記念館は、「次世代を担う若者の育成には、大学に図書館が要るだろう」という故古川為三郎・志ま夫妻のご厚志により、昭和39年11月



「さざれ石」贈呈のあいさつをする総長

に本学に寄附された由緒ある建物で、昭和56年に中央図書館ができるまで古川図書館の愛称で親しまれてきました。昭和57年からは名古屋大学博物館の前身である古川総合研究資料館、平成2年からは年代測定資料研究センター、平成12年からは大学博物館として活用されています。

除幕式には、濱口総長、大路博物館長、足立 守 PhD 登龍門推進室特任教授が出席し、総長からは、古川図書館は益川敏英本学特別教授や小林 誠本学特別教授ら本学ゆかりのノーベル賞受賞者もよく利用した建物であること、博物館が本学の情報発信センターとして社会貢献・地域連携できるのもこの建物のおかげであることが述べられ、その感謝の品として「さざれ石」を贈呈する旨のあいさつがありました。この「さざれ石」は、博物館が研究用に確保していた奈良県産の2億年前の礫岩で、為三郎氏が巨木などの長い年月を経たものが好きだったことから選ばれました。これを受けて、為三郎氏の孫で古川美術館館長の古川為之氏から、「名古屋大学が50年前の祖父母の思いを忘れないという気持ちに感激しました」というお礼のことがあり、総長と古川為之氏が「さざれ石」の除幕を行い、お披露目の式典は終了しました。

永年勤続者表彰式を開催

平成26年度名古屋大学永年勤続者表彰式が、11月21日(金)、豊田講堂第1会議室において挙行されました。

表彰式には受彰者30名のうち22名が出席し、濱口総長から一人ひとりに表彰状が手渡された後、受彰者へ20年間の職務の精励に対しての労いのほか、その日々の積み重ねにより、本学が、研究力強化や国際化事業への採択、多額の



あいさつする総長

競争的資金、附属病院収入を獲得できたことへの感謝のことばが述べられました。

続いて、「今後の国立大学を取り巻く環境は、厳しさを増すことが予想され、18歳人口の急激な減少により国立大学の存在そのものが危うくなる事態も想定されるが、教員と職員とが共に築いていく教職共同の原点に戻って困難に立ち向かって欲しい。これからの本学のさらなる発展を担うのは、ここにお集まりのみなさんであり、今後も教育、研究、医療を支え、ますます活躍して欲しい」と激励のことばが送られました。

その後、受彰者を代表して安立なぎさ医学部附属病院看護師長から、この20年を振り返り、大学院の重点化、国立大学の法人化、多数のノーベル賞受賞者の輩出等の出来事の紹介があり、この日をまた新たな契機として、一人ひとりが皆で力を合わせ、本学のさらなる発展に少しでも寄与できるよう精励したい、と決意のこもった謝辞が述べられ、終始お祝いムードに包まれた表彰式となりました。

シュトイデカルテットレクチャーコンサートを開催

シュトイデカルテットレクチャーコンサートが、11月25日(火)、豊田講堂において開催されました。シュトイデカルテットは、ウィーン・フィルのコンサートマスターを務めるフォルクハルト・シュトイデ氏を中心に次世代を担う演奏家たちで結成されたカルテットであり、現在、世界中で活躍しています。



コンサートの様子

レクチャーコンサートはカルテットのメンバーによる学生への公開レッスンの部とコンサートの部の2部構成で行われました。公開レッスンの部では、カルテットのメンバーが4カ所に分かれ、計8組の愛知県立芸術大学の学生へ指導を行いました。普段、関わることのない一流の演奏者からの直接指導ということもあり、どの学生も熱心に指導を受けていました。

公開レッスン終了後には、豊田講堂ホールにおいてシュトイデカルテットによるコンサートが行われました。本学からは濱口総長をはじめ理事、教職員が出席し、愛知県立芸術大学からは戸山俊樹副学長や百武由紀教授らが出席し、あいにくの雨にもかかわらず一般の参加者を含め約800名がコンサートに訪れました。冒頭、シュトイデ自身によるトークセッション、メンバーからのカルテットの紹介等が行われました。引き続き、ベートーベン「弦楽四重奏曲 第11番 セリオソ」、ラベル「弦楽四重奏曲」の演奏が行われ、聴衆はシュトイデカルテットによる世界トップレベルの素晴らしいアンサンブルを楽しみました。

成均館大学との共同シンポジウムの開催

成均館大学との共同シンポジウムが、11月26日(水)、27日(木)の両日、韓国の成均館大学水原キャンパスにおいて開催されました。

今回で4回目となる本シンポジウムは、昨年度のナノ分野に加え、バイオ、プラズマの各分野においても開催され、より大きな規模となりました。本学からは鈴置副総長をは



記念撮影の様子

じめ、大学院理学研究科、大学院工学研究科、大学院医学系研究科、医学部附属病院等の教員14名が参加しました。

はじめに、キム・ヒヨンス成均館大学副学長、鈴置副総長から、それぞれの大学について紹介も交えた開会のあいさつがあり、参加者の自己紹介のあとに、各セッションがスタートしました。

各分野3会場に分かれてスタートしたセッションでは、双方の大学が交互に発表を行い、スライドを用いての英語による一人約30分の発表は、質疑応答も交えて活発に展開されました。

成均館大学の学生も多く参加し、両大学の最先端の研究発表や討論に熱心に聞き入っていました。

2日間に渡って開催された本シンポジウムは、ユー・ジベオム成均館大学工学部長、篠原理学研究科長の閉会のあいさつによって大盛況のうちに終了しました。

今後も両大学がより活発に意見交換を行い、より良い協力・信頼関係を築きながら研究交流が行われることが期待されます。なお、来年度は本学にて開催する予定です。

駐日南アフリカ大使による講演会を開催

モハウ・ペコ駐日南アフリカ共和国特命全権大使の講演会が、11月27日(木)、野依記念物質科学研究館において開催されました。この講演会は、南アフリカ共和国の民主化20周年を記念した、「ネルソン・マンデラ メモリアルレクチャー」として大使館から提案があり、実現しました。

講演は、“AFRICA IN THE 21ST CENTURY Making TICAD



講演の様子

V Work of Africa”と題して全て英語により行われました。大プリニウスの言葉、「新たなることは常にアフリカからやってくる」の紹介から始まり、ネルソン・マンデラが収監されていた際のエピソードや、本物のリーダーに必要とされる要素に触れ、飢餓などの昔のアフリカのネガティブなイメージと、急速な経済成長を続けている現在の状況を比較紹介して、変化するアフリカを強調し、数学・天文学・建築等様々な分野においてアフリカが発祥の地である等、幅広い話題が述べられました。

講演会には、70名近くの学生・教職員が参加し、約1時間にわたる講演に、熱心に耳を傾けました。時間は限られていたものの、講演後の質疑応答では、様々な質問に対するユーモアを交えた受け答えに、参加者は更にアフリカへの関心を高めた様子でした。

日本留学フェア2014を開催

日本留学フェア2014が、11月8日(土)、ウズベキスタンのタシケント市において開催されました。これは、ウズベキスタンに海外大学共同利用事務所を持つ本学と、ウズベキスタン・日本人材開発センター (UJC) との共催、並びにウズベキスタン高中等教育省、在ウズベキスタン日本大使館及び名古屋大学全学同窓会ウズベキスタン支部の協力



サマルカンドで現地高校生に説明を行う渡辺理事

を得て実現し今回で4回目の開催となります。

本学のほかには、国際大学、立命館アジア太平洋大学 (APU)、筑波大学、東京大学、大阪大学、立命館大学の計7大学が参加しました。

開会にあたり、渡辺理事から日本側を代表してあいさつがあり、本学ウズベキスタン事務所が、本学のみならず広く日本国内の大学とウズベキスタンとの学生交流等を推進するために設置され、ウズベキスタンから日本へ留学する際の窓口として重要な役割を担っていることなどの説明がありました。当日は晴天に恵まれ、900名を超える高校生・大学生の来場があり大盛況のうちに終了しました。

また、11月10日(月)には、サマルカンド国立大学及びウズベキスタン高中等教育省の協力を得て、サマルカンド市においても同フェアが開催されました。

この会場には本学のほか、国際大学、筑波大学、東京大学、大阪大学、立命館大学の計6大学が参加しました。サマルカンド市での開催当日も晴天に恵まれ、1,700名を超える高校生・大学生の来場があり大盛況のうちに終了しました。

ラジャマンガラ工科大学タンヤブリ校と学術交流協定を締結

本学とタイのラジャマンガラ工科大学タンヤブリ校との学術交流協定に関する覚書の調印式が、12月8日(月)、同校において挙行されました。ラジャマンガラ工科大学タンヤブリ校は、首都バンコクから北へ40kmに位置し、学部は12学部、学生数は大学院生を含め約2万人、教員数は約800人を数える総合大学です。



調印式の様子 (左がプラサート・ピンパトムラット学長、右が松尾副総長)

本学では、文部科学省「革新的イノベーション創出プログラム (COI STREAM)」の採択を受け、昨年4月に「未来社会創造機構」を設置し、「多様化・個別化社会イノベーションデザイン拠点 - 高齢者が元気になるモビリティ社会 -」の実現に向けて、産業界とともに分野横断的な研究開発を推進しています。同機構内の「社会イノベーションデザイン学センター」では、今年の春から、ラジャマンガラ工科大学タンヤブリ校において、パーソナルモビリティを用いた社会実証実験を開始する予定です。これを契機に両大学間の学術交流及び研究成果の社会実装に向けた活動の推進を図るため、本協定を締結するに至りました。

調印式には、来賓として、小林茂紀在タイ日本国大使館参事官、山下邦明日本学術振興会 (JSPS) バンコク研究連絡センター長をはじめ、タイに事務所を設置している日本の大学及び企業関係者等が出席しました。同機構の機構長である松尾副総長は、本学のアジア戦略に触れ、社会実証実験への協力を要請し、プラサート・ピンパトムラットラジャマンガラ工科大学タンヤブリ校学長からは、今後の人材交流への期待が述べられました。

第3回石田賞授賞式を挙

第3回石田賞授賞式が、11月17日(月)、豊田講堂第5会議室において挙行されました。石田賞は、石田財団からのご寄附の意志に基づき、将来の発展が期待できる優れた研究能力を有する若手研究者を顕彰し、その研究意欲を高め、研究の発展を支援する目的で創設されました。今年度は人文・社会科学、自然科学の両分野に分け、東海3県(愛



記念撮影

知、岐阜、三重)を対象として募集し、慎重な審査の結果、新田英之理学研究科特任講師を顕彰することに決定しました。

授賞式には、濱口総長、國枝理事、山本理事、鮎京理事及び審査委員が出席しました。総長からは、「今回の受賞を励みに、今後も高い志をもって自らの研究に精進し、我が国の学術研究の発展に貢献していただきたい」とのあいさつがあり、國枝理事から受賞者の紹介及び研究テーマについての審査講評がありました。

受賞者である新田特任講師からは、「石田賞の受賞は光栄なことであり、今後ますます研究に精進したい」との謝辞がありました。

その後、豊田講堂応接室において、受賞者及び授賞式出席者の懇談が行われ、研究の動機や今後の研究の発展性についての意見交換が行われました。

大学文書資料室がシンポジウムを開催

第2回大学文書資料室シンポジウム「今、なぜ大学史かーその意義と展望ー」が、11月26日(水)、ES総合館ESホールにおいて開催されました。大学文書資料室は昨年4月、理事を室長とする運営支援組織となるとともに、室内を歴史資料・大学史編纂部門と歴史公文書部門の2部門に分ける改組を行いました。そして歴史資料・大学史編纂部



討論の様子

門は、長期的には100年史の編さんを見据え、本学の歴史の調査研究を積極的に行い、これを学内外にアピールしていくミッションに、これまで以上に積極的に取り組んでいくことになりました。今回のシンポジウムは、その一環として位置付けられます。

シンポジウムでは、寺崎昌男東京大学名誉教授による基調講演「大学沿革史の効用を考えるー特色の確認、アイデンティティの形成、そして自校教育ー」、瀬戸口龍一専修大学大学史資料課長、吉川卓治教育発達科学研究科教授、西山伸京都大学大学文書館教授、福岡猛志日本福祉大学名誉教授による小報告の後に、講演者と報告者をパネリストとし、約50名の参加者も交えた討論が行われました。討論では、大学史のアピールには、刊行物に限っても様々な形態があり、さらに展示館の設置や自校教育といった幅広い方法が考えられること、それらは、高い学術的な価値を持つだけでなく、教職員や学生のアイデンティティ形成の核となるとともに、「大学の窓」として卒業生やOB・OG、入学希望者、一般社会と大学とをつなぐ、これからの大学運営に必要不可欠なものであり、一面では大学の「格」を示すものであることなどが議論されました。

國枝理事が大学付属高等研究院国際連盟の総会において基調講演

國枝理事は、安藤高等研究院長とともに、11月27日(木)から29日(土)の間、国立台湾大学で開催された大学付属高等研究院国際連盟 (UBIAS) の第3回総会に出席し、「アカデミアにおけるグローバリゼーション」と題して、基調講演を行いました。

UBIAS は、大学が設置する高等研究院が、国際的な連



講演を行う國枝理事

携を深め、研究交流を促進することを目的として設立された組織です。本学高等研究院は平成23年より UBIA S 運営推進会議のメンバーとして選出され、ホスト機関として、次世代リーダーを育成する事業、「インターコンチネンタル・アカデミア」(ブラジルサンパウロ大学高等研究院と共催)の企画・運営を担っています。

基調講演の中で、國枝理事は、アカデミアにおけるグローバリゼーションの光と影に触れながら、分野間、各国独自の多様性を尊重する必要性を強調しました。さらに、大学の国際戦略のあるべき姿について、本学の事例を挙げて議論しました。会場からは、本学の戦略などについて多くの質問が寄せられました。また、「高等研究院における自然科学と技術の貢献」のセッションにおいても、國枝理事は講演を行い、本学の若手育成プログラム (YLC) について説明し、「インターコンチネンタル・アカデミア」の実施に向け意気込みを述べました。

今回の UBIA S 総会は、本学高等研究院と国立台湾大学人文社会科学高等研究院との共催で行われ、各国26の高等研究院から約60名が参加し、高等研究院同士の連携などについて、活発な議論が繰り広げられました。

リーディング大学院プログラム合同シンポジウムを開催

リーディング大学院プログラム合同シンポジウムが、12月3日(水)、野依記念学術交流館において開催されました。今回のシンポジウムは、「持続可能な開発」をテーマとして、「グリーン自然科学国際教育研究プログラム」、「法制度設計・国際的制度移植専門家の養成プログラム」、「PhD プロフェッショナル登龍門」、「フロンティア宇宙開



記念撮影

拓リーダー養成プログラム」、「実世界データ循環型リーダー人材養成プログラム」、「『ウェルビーイング in アジア』実現のための女性リーダー育成プログラム」の6つの博士課程教育リーディングプログラム参加学生が企画・運営等を担当しました。

本シンポジウムは全て英語で実施され、約160名の学生・教職員が参加しました。山本理事、杉山 直理学研究科教授のあいさつに続き、蟹江憲史東京工業大学大学院社会理工学研究科准教授・国際連合大学サステナビリティ高等研究所シニアリサーチフェローと高瀬千賀子国連地域開発センター所長から、世界の現状や、今後私たちに何が求められるのかを考えるための講演が行われました。午後からは、6つのプログラム所属の学生で構成された6チームが、「持続可能な開発」をテーマとした課題に対する発表を行い、引き続き2名の講演者と6名の学生によるパネルディスカッションが行われました。最後に、濱口総長から学生に向けてのあいさつがあり、閉会しました。

平成26年度名古屋大学コンベンション開催支援セミナーを開催

平成26年度名古屋大学コンベンション開催支援セミナーが、11月21日(金)、野依記念学術交流館1階会議室で開催されました。本セミナーは、本学内で国際会議を開催する教員を対象としており、5回目を迎えた今回は日本政府観光局、公益財団法人名古屋観光コンベンションビューロー及び本学の共催により開催され、約50名が参加しました。



吉田教授による講演の様子

セミナーの開催に先立ち、藤巻学術研究・産学官連携推進本部副本部長から、昨年度に本学で開催された国際会議の件数は全国で4位であったこと、今後更に学内における国際会議の件数を増やし、本学の存在感を高めるため、ノートやペン、学内外地図といった名大オリジナルグッズを作成したことの報告が行われました。

続いて、川崎悦子日本政府観光局コンベンション誘致部次長から日本への外国人来訪者数が1,200万人を超える勢いであること、今後、日本政府観光局として国際会議の日本への誘致を重要課題として取り組むことなどの紹介がありました。

その後、吉田久美情報科学研究科教授から、アジア初の開催であった第27回国際ポリフェノール会議の準備と実行についての講演があり、花澤弥生美名古屋観光コンベンションビューローコンベンショングループ長から、新たに本学と協働で作成した国際会議支援マニュアルに基づき、国際会議開催支援体制について説明がありました。

最後に行われた個別相談では、出席者から活発な質疑、要望が多く寄せられ、国際会議開催に関する関心の高さがうかがえました。

赤崎 勇本学特別教授、巽 和行特任教授が日本学士院新会員として選定される

赤崎 勇特別教授及び巽 和行特任教授が12月12日(金)、日本学士院新会員として選定されました。

同院は学術上功績顕著な科学者を優遇し、学術の発達に寄与するため必要な事業を行う機関であり、会員は学術で顕著な功績を修めた科学者から選ばれ、終身任期の国家公務員特別職の身分が付与されます。現在、会員は、人文科学部門で66人、自然科学部門で77人の計143人です。

両氏の専門及び研究成果は以下のとおりです。

赤崎 勇特別教授

専 門 半導体工学

研究課題 高品質 GaN 結晶の作成に成功
青色発光ダイオードの開発

巽 和行特任教授

専 門 無機化学

研究課題 合成した活性中心モデル錯体を用いて
酵素機能を解明する学術的基盤を確立



赤崎 勇特別教授



巽 和行特任教授

有機薄膜デバイスのスピン計測

黒田 新一 大学院工学研究科教授

有機エレクトロニクス

これまで有機物質は電気を流さない絶縁体の代表と思われてきましたが、最近では“電気を流す有機分子”が発見され、それらをエレクトロニクスへ応用することを目指した有機エレクトロニクスが新しい技術として注目されています。このような分子は半導体的な性質を持ち、軽量性・柔軟性、低環境負荷などの有機物の利点を活かした次世代エレクトロニクス素子への応用が期待されています。有機トランジスタ (FET) や太陽電池、電界発光 (EL) 素子などが世界中で研究されており、有機 EL はスマートフォンのディスプレイや照明などにすでに応用され、その他のデバイスの性能も向上しています。

一方、有機物質は分子同士がファンデルワールス力とよばれる弱い力で結合しており、これが有機薄膜に柔軟性を持たせる原因となっていますが、他方、薄膜中で分子配列の乱れを生じ、しばしば電気伝導度の低下を招きます。このため、電荷を担うキャリアの電子状態などの本質的な情報を電気的な測定から得ることは難しくなります。そこで我々のグループでは、キャリアの磁気モーメント (スピン) を高感度に検出できる電子スピン共鳴 (ESR) 法を用い、有機薄膜デバイス内のキャリアの情報をマイクロに調べる新しい手法を開発してきました。この手法により、分子の向き (配向)

とキャリアの電子状態を同時に決定することが可能となり、素子の性能向上をもたらす要因や、有機分子の新たな物性が明らかになりつつあります。以下に、有機トランジスタを例として、研究内容を紹介します。

有機トランジスタ中のスピンを見る

有機 FET は、絶縁膜上に形成した有機分子の薄膜を電極で挟み込んだ構造を持ち、電圧の印加によりキャリアを注入し、電流を制御する素子です。キャリアは絶縁膜との界面のわずか数分子層の厚みに蓄積するため、界面の局所的な状態が素子の性能を大きく左右します。我々の開発した方法は、有機 FET のサイズや電極材料の伝導度な

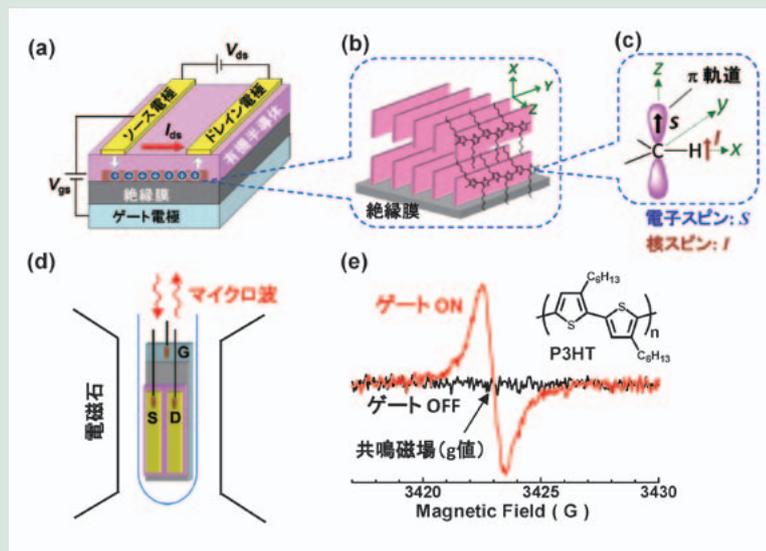


図1 (a) 有機トランジスタの構造 (b) デバイス界面における半導体高分子の配向 (c) 高分子のπ軌道 (d) FETのESR測定模式図 (e) 高分子半導体中に電界注入されたキャリアのESR信号

などを工夫して、デバイスの界面に蓄積されたわずかに 10^{11} 程度のスピンの ESR 信号の検出を可能としました。測定では、ESR 試料管に入れた FET を磁界中にセットし、界面に蓄積したキャリアのスピンの磁気モーメントが吸収するマイクロ波の信号を検出します。有機半導体の電荷キャリアは、分子面から垂直方向に伸びた π 軌道に存在し (π 電子)、軌道と磁場とのなす角度によって ESR 信号は顕著な方向依存性を示します。こうして得られる ESR 信号から、 π 電子の電荷密度の分布 (波動関数) や、界面での分子配向やキャリアダイナミクスなど、他の方法では得ることのできないミクロな情報が得られます。特に高分子半導体では、分子面が基板に垂直なエッジオン配向をとる

と (図 1)、キャリアが顕著な運動性を示し、移動度が向上することが分かりました。また、最近開発された高移動度の分子 (図 2) では、界面での分子配向の乱れが極めて少ないことや、硫黄原子上に電子密度が大きいことが有機分子の相互作用を増し、移動度を高めることが分かりました。このように、高い移動度を得るための分子の設計指針がミクロな観測により明らかになり、高移動度分子を開発するグループとの連携も深まりつつあります。

新しい分子の機能を求めて

上記のように、有機 FET の ESR 研究はデバイスの働きをミクロな観点から解明してくれますが、キャリア注入量をコントロールしながら有機分子の構造と物性の関係を明らかにする方法としても注目されています。高分子半導体では、イオン液体とよばれる高キャリア注入が可能な絶縁体を使用して、高キャリア濃度ではバイポーラロンとよばれる非磁性状態が出現することがわかり、磁性状態をコントロールするスピントロニクス分野の研究にも役立っています。

さらに最近、結晶性の高い高分子の薄膜に、化学的手法により高濃度に電荷を生成すると、エッジオン配向の領域のみで金属的な電子状態が実現することが分かりました。この性質は、最近、熱電変換の性質から注目されている金属的な高分子の高性能化に大変有利です。今後、上記のような顕著な物性をトランジスタや太陽電池などの素子構造の中で分子配列を制御しつつ実現し、またスピンの性質を利用することにより、有機分子の究極的な性能や新しい機能をミクロに探求していきたいと考えています。

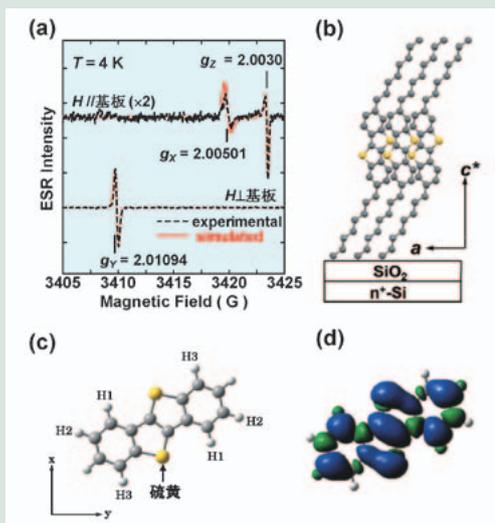


図 2 (a) 高移動度分子の ESR 信号の角度依存性 (b) デバイス界面における分子配向 (c) 高移動度分子 (BTBT) の分子構造、黄色は硫黄原子を示す (d) 高移動度分子の分子軌道 (スピン分布)

1978年大阪大学理学研究科博士課程修了。アラバマ大学博士研究員、電子技術総合研究所主任研究官、研究室長を経て、1996年名古屋大学工学部教授、2004年より同工学研究科マテリアル理工学専攻応用物理学分野教授。研究分野は有機固体物性と磁気共鳴。趣味は音楽と散歩。有機エレクトロニクス材料の研究は長年携わっているが、結晶とは異なり分子の向きには分布があり、研究対象としては難しさが伴う。それでも色々な方法で配向させた材料などを用いることにより、材料の本質が見出され、多様な分子を取り込むことが出来る有機の世界には多くの可能性があると感じている。

くろた しんいち



「評価されたい」との付き合い方

「人の間で生きる」人間は、不思議な存在です。周りから評価されたいのだけれども、実際にされるとあまりいい気持ちがない。自分を過大評価してはいけないことは分かっているのだけれども、やめられない。

私は大学院に入って以降、組織の人事管理について研究してきましたが、いつしか上で述べたような不思議な人間性に興味を持つようになり、特に民間企業の人事評価の実態について研究するようになりました。

企業を観察したり実際に聞き取りをしてみたりすると、評価に関する従業員にとっての不満の種は事欠きません。自分の取り組みを上司は十分見てくれなかった。自分の評価の結果について、納得できる説明がもらえなかった。もちろん会社の人事部も、業務目標についてあらかじめ合意をとる、評価の結果についてちゃんと部下に説明する、といったことを管理者に求めています。しかし、例えば管理者に悪意がない場合でも、さまざまな「組織の事情」によって、そうなっていないようです。

ただ、足元を見ると、文句を垂れる従業員ばかりでもありません。多くの人が、価値ある人間関係や仕事内容を日常の中から見出し、「評価

に一喜一憂している暇はない」という姿勢で仕事に臨んでおられます。人事管理をする側としては、こういう人々にどう寄り添い、支えられるのかを考えなければなりません。

企業と従業員が本当の意味で対等に話し合う中で、皆が自分自身に誇りを持てる、仕事の内容に見合う報酬を支払う。全ての仕事が他の仕事とのつながりの中でかけがえない意味があり、その価値に優劣をつけない。誉めるべき点を誉め、叱るべき点を叱る。昇進する人、同じ仕事をずっと続ける人、別のキャリアを目指す人。それぞれがそれぞれの生き方を自然に選び、周りもそれに自然にエールを送る。

自分自身の組織を深く知ることから、人事管理は始まります。報酬と結びつく人事評価は、ほどほどの距離感で付き合うべき、一種の必要悪でしょう。「年功序列」といったムラ社会的な優しさと厳しさを兼ね備えたやり方も、「成果主義」といった刺激とプレッシャーを露骨にあおるやり方も、あるいはその他のやり方も、2014年の従業員のニーズを深いところで捉えた上で選択されたものでないと、従業員を過度に刺激し、思わぬ結果を引き起こすでしょう。

項目	金額
基本給	349,878
手当	12,345
合計	362,223
社会保険料	4,567
合計	363,336

項目	金額
基本給	21
手当	12,345
合計	12,345
社会保険料	0
合計	12,345

大学院多元数理科学研究科設立20周年記念行事を開催

●大学院多元数理科学研究科

大学院多元数理科学研究科は、11月19日(水)、理学南館坂田・平田ホール及び南部食堂において、同研究科の設立20周年記念行事を開催しました。同研究科は大学院重点化の流れの中、数学の一層の飛躍とそれによる新しい科学の発展の要求に応えることを目標に、平成7年4月に独立研究科として設立され、今年設立20周年の節目を迎えました。



講演をする我妻氏

記念講演会では、まず、納谷 信多元数理科学研究科教授による開会の辞、菅野同研究科長のあいさつに続いて、藤井理事より、お祝いと激励のことばがありました。続いて、23年間本学に在籍した経歴を持つ、向井 茂京都大学数理解析研究所所長による「若き数学者の名古屋大学－『フーリエ変換』の頃とそれに纏わる話－」と題する講演、次に、昭和62年に理学部数学科を卒業後、日本アイ・ビー・エム株式会社でネットワーク & セキュリティサービス担当理事を務める我妻三佳氏による「私の歩みとキャリア・ディベロップメント－ある数学科卒業生のサラリーマン生活－」と題する講演がありました。

南部食堂において開催された祝賀会は、山上 滋同研究科教授の開会の辞の後、栗辻康博文部科学省研究振興局・数学イノベーションユニット次長と坪井 俊東京大学大学院数理科学研究科長による来賓あいさつに続き、篠原理学研究科長により乾杯の発声が行われ、終始、和やかな歓談となりました。最後に、日比正博数理科学同窓会副会長からあいさつがあり、祝電披露後、多元数理科学研究科の今後益々の発展を祈念し盛会のうちに閉会となりました。

第4回名古屋大学社会イノベーションデザイン学センターシンポジウムを開催

●未来社会創造機構

未来社会創造機構社会イノベーションデザイン学センターは、12月4日(木)、豊田講堂ホール、アトリウムにおいて、「第4回名古屋大学社会イノベーションデザイン学センターシンポジウム－聴ける、触れるイノベーション」を開催しました。本学では、文部科学省「革新的イノベーション創出プログラム (COI STREAM)」の採択を受け、



ミニトークの様子 (左から、総長、村田さん、齋藤センター長)

昨年4月に「未来社会創造機構」を設置し、「多様化・個別化社会イノベーションデザイン拠点－高齢者が元気になるモビリティ社会－」の実現に向けて、産業界とともに分野横断的な研究開発を推進しています。

今回のシンポジウムは、同機構内の「社会イノベーションデザイン学センター」の活動内容を多くの方々に知ってもらうために開催しました。同センターのシンポジウムは、今回で4回目の開催となり、学内外から一般市民の方を含めて200名を超える参加がありました。松尾同機構長による開会あいさつの後、村田千佳さんのピアノ、奥泉貴圭さんのチェロ、猶井悠樹さんのバイオリンによるクラシックコンサートを開催しました。コンサートの終了後には、引き続き、濱口総長、村田千佳さん、齋藤社会イノベーションデザイン学センター長の3人によるミニトーク「大学発！イノベーション」が行われました。一方、アトリウムでは、同センターのミニプロジェクト／ミニラボの「体感！ブース展示」を開催しました。

第19回博物館特別展「絹谷幸太 創知彫刻」を開催

●博物館

博物館では、7月24日(木)から11月29日(土)の間、第19回博物館特別展「絹谷幸太 創知彫刻」を開催しました。期間中は博物館の前庭、玄関テラス、2階常設展会場の一角、3階展示室で彫刻家である絹谷氏の石彫が展示され、延べ12,104名の入館者がありました。また、計8回の特別講演会、さらに10月18日(土)に開催されたホームカミング



ギャラリートークで作品の素材解説をする足立特任教授

デイでは絹谷氏と足立 守 PhD 登龍門推進室特任教授によるギャラリートークと石割り体験イベントも行われました。

今回の特別展は“五感のすべてを使って素材の石への理解を深めながら、アート作品を鑑賞できる彫刻”を目指す絹谷氏の考えに従って、作品に直接触ることができたため、とくに子供に人気がありました。石彫に乗って遊んでいる子供の写真を撮る親子連れも多く、「石と話せたような気がする」、「石に癒された」、「作品に触れて石は冷たいというイメージが変わった」、「こうした彫刻展ができる名大博物館は素晴らしい」、「博物館の周辺だけ雰囲気が違う」といった感想が寄せられました。こうした市民の声は、同館が進めている『市民に憩いと思索の空間を提供する』キャンパスミュージアム構想とよく合致するものです。

とくにホームカミングデイで行われた巨大な花崗岩の原石をクサビで割る体験イベントは大盛況であり、横2.5m、重さ5トンの石がドンという鈍い音をたてて割れたときには、約50人の参加者から歓声が沸き起こりました。参加者は石彫の制作過程の一端を知るとともに、制作が危険と隣り合わせであるということを実感していました。

発達障害に関わる専門家のための講演会を開催

●発達心理精神科学教育研究センター、大学院教育発達科学研究科

発達心理精神科学教育研究センター、大学院教育発達科学研究科は、11月30日(日)、12月6日(日)の両日、IB電子情報館大講義室において、発達障害に関わる専門家のための講演会「発達障害のある生徒への理解と支援」を開催しました。これは、今年度より受託した文部科学省「発達障害に関する教職員育成プログラム開発事業」における教



講演する酒井特任助教

職員育成の一環として行われたもので、幼稚園から小・中・高等学校の教職員や自治体教育委員会関係者及び発達障害の支援に関わる専門家が延べ500名参加しました。

1日目には、野邑健二同センター特任准教授が、発達障害の特性と概念、臨床像や診断について、「発達障害の理解—どこまでが発達障害なのか?—」と題して講演を行いました。また、酒井貴庸同研究科特任助教が、特別支援教育の校内連携に焦点をあて、応用行動分析の立場から支援体制の推進についての講演を行いました。

2日目には、大久保賢一畿央大学准教授による「積極的行動支援(PBS)による発達障害生徒の支援」と題した講演が行われ、「行動の問題」を解決する方法が紹介されました。小倉正義鳴門教育大学准教授からは、「発達障害生徒の感情マネジメント」と題した講演が行われ、生徒が自分の感情と上手につきあうための方法が紹介されました。定員を超える申し込みや、参加者へのアンケートからは、発達障害児・生徒支援についてのニーズの高さがうかがえました。本センターでは、継続して発達障害の理解と支援に関する研修会や教職員育成プログラム開発を行っていく予定です。

ICCAE 第6回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センター（ICCAE）は、12月5日（金）、農学部第7講義室において、2014年度第6回オープンセミナーを開催しました。今回は、宮浦理恵東京農業大学助教を招き、「インドネシア・西ジャワにおける持続的農業と農民による農法・技術の選択－アグロエコロジーの観点から－」と題して講演が行われました。インドネシ



講演する宮浦助教

アの首都ジャカルタからボゴールの方向に約60km離れた位置にある、農民568名、土地無し農民1,700名のペチル村は、主に耕種（イネ・サツマイモなど）、小家畜（山羊、鶏）と内水面養魚を生業としていますが、家畜のウエルフェアにあまり頓着しない飼育の方法や養魚池の水の放出に伴う環境への影響などに注意を払わない、いわばあまり力を入れない農業を行っています。一方では、不在地主や成功した仲買人として農民を使う者も出てきました。サツマイモの茎葉や家畜糞尿及び養魚廃液を農業経営の中で循環させる方法はあるのに、それを行わない農民の有り様は、村社会が崩壊しつつある都市近郊農村の実態を示しています。このような状況の中で、農民を覚醒させ、環境に配慮した持続的な農業に向かわせることの意義やその方法について、セミナー終了後も参加した大学院生と講師の間で熱心な議論が続きました。

減災館第2回特別企画展「資料からよみとく濃尾地震」を開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、10月28日（火）から11月29日（土）の間、減災館において第2回特別企画展「資料からよみとく濃尾地震」を開催しました。1891年（明治24年）10月28日に発生した濃尾地震は、明治維新から24年が経過し、西欧の影響を受け、近代化を進める過程にあった日本を襲った地震でした。地震による被害は、震源に近かった



展示と併せて行ったギャラリートークの様子

岐阜県・愛知県を中心に、大阪府から長野県まで広域に及びました。地震の発生が午前6時38分という朝食時間帯と重なっていたため、地震後に火災が発生し被害を大きくしました。また、紡績工場、鉄橋など、当時の最新の建築物が被害を受けました。

濃尾地震のニュースは電報・新聞・写真などを通して日本国内に幅広く伝えられました。英字新聞が日刊紙として発行されていたこともあり、地震のニュースは海外でも大きく報道されました。

展示では、濃尾地震について海外に伝えるきっかけとなった、帝国大学教授ミルン、バートン、そして写真家小川一真による“The Great Earthquake of Japan 1891”の初版本、写真集、浮世絵などを紹介しました。“The Great Earthquake of Japan”では、当時の被害とそこで暮らす人々の様子が、120年以上前のものとは思えないほど鮮明に感じられます。また、浮世絵には、当時濃尾地震について話題となったことが描かれていますが、なかには、事実とは異なる描写もあり興味深いものとなっており、来館者からは、「濃尾地震が身近に感じられ勉強になった」という感想が寄せられました。

発達障害児支援及び特別支援教育に関する国際会議を開催

●大学院教育発達科学研究科、発達心理精神科学教育研究センター



会議の様子

大学院教育発達科学研究科、発達心理精神科学教育研究センターは、10月16日(木)、モンゴル国立教育大学において、同大学とともに発達障害児支援及び特別支援教育に関する国際会議を開催しました。本学からは日本の乳幼児健診、発達障害児の早期発見とその後の療育、特別支援教育の実際、発達障害児に対する支援方法などを紹介し、モンゴル側からは、モンゴルにおける特別支援教育の現状や課題などが紹介されました。約40名が参加し、日本の現状に関する質疑応答が活発に行われ、日本の健診システムや特別支援教育に関する関心の高さがうかがえました。この分野に関する2国間交流は一昨年からは始まり、今回は会議のほかに現地の特別支援学校・幼稚園の視察とモンゴル人障害児童の公開ケース検討会も開催され、検討会には約70名の現職教員が参加するなど有意義な交流となりました。今後よりいっそうの、2国間共同研究の発展が期待されます。

第16回まちとすまいの集いを開催

●大学院環境学研究科



講演会の様子

大学院環境学研究科建築学教室は、11月22日(土)、環境総合館レクチャーホールにおいて、第16回まちとすまいの集い「かしこく住まうーつながり、まもり、いかすー」を開催しました。

少子高齢化や環境破壊問題、エネルギー問題など、私たちを取り巻く環境は大きく変化しており、また、南海トラフの巨大地震発生も懸念されています。このような状況の中で、私たちがいかにうまく自然と共生しつつ安全な生活を送ることができるかが、今後ますます重要になります。そこで、脇坂圭一施設・環境計画推進室准教授が「ソトマをわかちあう家に住まう」、田中英紀同推進室特任教授が「自然の恩恵に与って快活に住まう」、古川忠稔環境学研究科准教授が「地域産木材で建てた家に住まう」と題して、3名から、いかにより効率的に、環境にやさしく、安全に住まうかについて講演が行われました。約60名の一般市民や学生の参加があり、盛況のうちに終了しました。

第34回トークサロン「ふみよむゆふべ」を開催

●附属図書館



会場の様子

附属図書館は、12月3日(水)、中央図書館2階ディスカバリスクエアにおいて、第34回友の会トークサロン「ふみよむゆふべ」を開催しました。今回は、製本家・書籍修復家の岡本幸治氏による、「修復家による本の解剖学」と題した講演が行われ、学内外から47名の参加がありました。

講演では、まず、14世紀から現代に至るまでの製本技術の変遷について、実際の書物を示しながら解説が行われました。そして、岡本氏が過去の古典籍修復作業等を通じて知り得た、書籍の製本に使用される皮革の性質、紙などの材料、綴じ方の違いについて説明が行われました。また、日本でも松平定信の時代と平賀源内の時代の洋式製本の書物のつくりが異なっていることから、西洋書物の伝来時期の違いが我が国の書物にも影響を及ぼしていることなどの説明がありました。参加者からは、「紙1枚からでも見えてくる世界があると知り、大変興味深かった」などの感想が寄せられました。

和式馬術供覧を開催

●博物館



演武の様子

博物館は、11月23日(日)、教育学部附属中学校・高等学校の校庭において、体育会和式馬術部の主催により、和式馬術供覧を開催しました。この行事は、教育学部附属中・高等学校、木曾馬保存会との共催、木曾馬乗馬センターの協力を得て開催されました。

当日は、秋晴れの快晴に恵まれ、約200名の来場者が見守る中、和式馬術部員による馬上武術、打毬、流鏝馬の演武等がありました。流鏝馬は、神事として多くの地域で継承されてはいますが、近年では馬や乗り手不足から継承も難しくなっています。とくに打毬は、現在では宮内庁と青森県八戸市、山形県山形市で見られるのみで、とても貴重な演武となっています。

演武の後は、見学者も交えた打毬の体験も行われ、多くの来場者が木曾馬とのふれあいも含めて楽しみました。

ひらめき☆ときめきサイエンスを開催

●博物館



石器でクリを粉にする参加者

博物館は、12月6日(土)、博物館野外観察園において、ひらめき☆ときめきサイエンス「石器を使って縄文クッキーを作ろう」を開催しました。この体験学習は、縄文時代の人々にとって大変重要な食料だったクリを使い、遺跡から出土した縄文クッキーの分析結果を参考にして、縄文人と同じように石器を使ってクリを料理してみようというものです。小学生高学年13名、中学生3名、小・中学生の保護者6名の計22名が参加しました。

まず、観察園のセミナーハウスで、遺跡の発掘の様子のスライドを見ながら説明を聞き、次に石器を使って、乾燥したクリを砕いて殻をとり、粉にしたあと、ひき肉や卵を混ぜて団子状にして茹でました。縄文時代には調味料がほとんど使われず、それを再現したため、できあがった団子はあまり味がありませんでした。参加者は「味がしない!」、「素材の味がして、予想していたよりおいしい」など感想を話し合いながら、団子を試食しました。

第105回防災アカデミーを開催

●減災連携研究センター



講演する諸戸館長

減災連携研究センターは、11月27日(木)、減災館減災ホールにおいて、第105回防災アカデミーを開催しました。今回は、三重県桑名市長島町「輪中(わじゅう)の郷」館長である諸戸 靖氏を講師に招き「伊勢湾台風に学ぶー災害多発地帯?から学ぶことー」と題して行われ、71名が参加しました。

「伊勢湾台風」は、1959年9月の襲来から今年でちょうど55年の節目を迎えました。輪中の郷は、洪水から身を守るために発達した「輪中」をテーマとし、木曾三川の最下流域に位置する旧長島町(現桑名市長島町)の歴史・文化・産業を紹介する複合施設です。講演では、旧長島町における災害の歴史について紹介があり、度重なる木曾三川の洪水に適応し輪中によって川と共生してきたかつての暮らしぶりや伊勢湾台風における被災状況が貴重な写真・絵図とともに紹介され、低平な濃尾平野における災害に対する備え方について、諸戸館長の鋭い考察が展開されました。

受賞者一覧

ノーベル賞

受賞日	受賞名	受賞者の所属・職名	受賞者	備考
H26.12.10	ノーベル物理学賞	特別教授	赤崎 勇	
H26.12.10	ノーベル物理学賞	大学院工学研究科教授	天野 浩	

勲章関係等

受章日	受章名	受章者の所属・職名	受章者	備考
H26.11. 3	文化勲章	大学院工学研究科教授	天野 浩	
H26.11. 4	文化功労者	大学院工学研究科教授	天野 浩	

教員

受賞日	受賞名	受賞者の所属・職名	受賞者	備考
H24. 7. 5	日本法中毒学会 吉村賞	大学院医学系研究科准教授	財津 桂	
H25.11.13	第51回全国大学保健管理研究集会 優秀演題賞	総合保健体育科学センター 助教	古橋 忠晃	
H26. 3. 8	日本顕微鏡学会第38回関東支部講演会 最優秀ポスター賞	大学院生命農学研究科助教	大井 崇生	
H26. 3.18	化学工学会 2013年度優秀論文賞	大学院工学研究科教授	本多 裕之	
H26. 9.11	日本植物形態学会 第26回大会 ポスター賞	大学院生命農学研究科助教	大井 崇生	三宅 博（名誉教授）、 谷口光隆（大学院生命農学研究科教授）と 連名
H26. 9.18	日本分析化学会 平成26年度 奨励賞	大学院理学研究科特任講師	新田 英之	
H26. 9.18	平成25年度日本鉱物科学会 第15回論文賞	大学院環境学研究科教授	ウォリス サイモン リチャード	
H26. 9.19	第17回ヨウ素学会シンポジウム 優秀ポスター賞	大学院工学研究科研究員	仲辻 秀文	澤村泰弘（大学院工学研究科 D3）、 石原一彰（大学院工学研究科教授）と連名
H26. 9.24	第12回日本金属学会学術貢献賞	大学院工学研究科教授	藤澤 敏治	
H26. 9.24	第24回日本金属学会奨励賞 材料化学部門	大学院工学研究科助教	豊浦 和明	
H26. 9.24	第62回日本金属学会論文賞 工業材料部門	大学院工学研究科教授	村田 純教	
H26. 9.25	The 2014 AbbVie Lectureship (University of Illinois at Urbana-Champaign)	大学院工学研究科教授	石原 一彰	
H26. 9.25	情報処理学会 MPS 研究会功績賞	大学院情報科学研究科教授	北 栄輔	
H26. 9.27	第11回日本組織細胞化学会 若手研究者学術奨励賞	大学院医学系研究科講師	大崎 雄樹	
H26.10. 1	第9回（2015年）日本物理学会若手奨励賞	大学院理学研究科准教授	谷口 博基	
H26.10.11	第9回（2015年）日本物理学会若手奨励賞	基礎理論研究センター 特任助教	赤松 幸尚	
H26.10.15	情報処理学会 論文誌ジャーナル 特選論文	大学院情報科学研究科 准教授	吉田 則裕	他3名と連名
H26.10.17	日本口腔外科学会第14回学術奨励賞	医学部附属病院医員	萩原 純孝	
H26.10.26	特定領域研究奨励賞（小田賞）	大学院経済学研究科教授	柳瀬 明彦	
H26.10.31	日本学術振興会 科学研究費助成事業 平成26年度審査委員表彰	大学院生命農学研究科教授	吉村 徹	
H26.11. 1	2014年度第2回日本神経内分泌学会学会賞	大学院医学系研究科教授	大磯ユタカ	
H26.11. 1	平成26年度第23回日本ソノケミストリー学会 功績賞	大学院工学研究科教授	香田 忍	
H26.11. 1	平成26年度第23回日本ソノケミストリー学会 論文賞	大学院工学研究科教授	香田 忍	
H26.11. 1	平成26年度第23回日本ソノケミストリー学会 論文賞	大学院工学研究科准教授	安田 啓司	
H26.11. 2	地球電磁気・地球惑星圏学会 大林奨励賞	高等研究院特任助教	鈴木 臣	
H26.11. 6	平成26年度第31回日本結晶成長学会論文賞	大学院工学研究科教授	白石 賢二	
H26.11. 6	平成26年度日本結晶成長学会貢献賞	大学院理学研究科教授	上羽 牧夫	
H26.11. 6	形態創生コンテスト2014入選	大学院環境学研究科助教	吉田友紀子	金子侑樹（大学院環境学研究科 M2）、 平田 曜（大学院環境学研究科 M2）、 他1名と連名
H26.11.13	第8回溶液化学研究会 学術賞	大学院工学研究科助教	山口 毅	
H26.11.13	2014年日本鋼構造協会（JSSC）論文賞	大学院環境学研究科准教授	尾崎 文宣	
H26.11.14	平成26年度電子スピンスイエンズ学会 SEST 学会賞	大学院工学研究科教授	黒田 新一	
H26.11.15	第12回佐川特別賞	名誉教授	直江 知樹	
H26.11.15	第47回安達峰一郎記念賞	大学院法学研究科教授	水島 朋則	

受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・職名	受賞者	備考
H26.11.15	日本機械学会 生産加工・工作機械部門 優秀講演論文表彰	大学院工学研究科准教授	鈴木 教和	社本英二（大学院工学研究科教授）と連名
H26.11.17	第3回名古屋大学石田賞	大学院理学研究科特任講師	新田 英之	
H26.11.18	Poster Award, The 13th China-Japan-Korea Joint Symposium on Enzyme Engineering	大学院生命農学研究科 特任助教	ダムナニョヴィッチ ヤスマナ	
H26.11.19	6th International Conference on Integration of Renewable and Distributed Energy Resources (IRED2014) Good Poster Award 1st Prize	大学院工学研究科准教授	加藤 丈佳	
H26.11.19	ET AWARD 2014 審査員特別賞	大学院情報科学研究科附属 組込システム研究センター	附属組込 システム 研究センター	
H26.11.21	日本臨床精神神経薬理学会2014年 学会奨励賞	大学院医学系研究科講師	岩本 邦宏	河野直子（未来社会創造機構特任助教）、 尾崎紀夫（大学院医学系研究科教授）、 他5名と連名
H26.11.21	エフエヌ基金 第3回（2014年度） 研究開発奨励賞	大学院工学研究科助教	安井 隆雄	
H26.11.22	日本糖尿病協会 国際交流研究奨励賞	大学院医学系研究科 寄附講座助教	清野 祐介	
H26.11.23	日本熱物性学会 日本熱物性学会賞論文賞	大学院工学研究科准教授	長野 方星	
H26.11.29	第41回日本臓器保存生物医学学会学術集会 会長賞	革新ナノバイオデバイス 研究センター特任講師	湯川 博	
H26.11	第6回ラ ロッシュ ポゼ アジア-パシフィック 基金	大学院医学系研究科准教授	杉浦 一充	
H26.12. 3	RSNA2014（第100回北米放射線学会） Magna Cum Laude 受賞	情報戦略室教授	森 健策	林雄一郎（情報戦略室特任助教）、 中村嘉彦（情報戦略室研究員）、 小田昌宏（大学院情報科学研究科助教）、 伊神 剛（医学部附属病院講師）、 廣瀬友昭（大学院医学系研究科大学院生） と連名
H26.12. 4	Asian Core Program Lectureship Award (selected by the coordinator of Hong Kong)	大学院工学研究科教授	石原 一彰	
H26.12. 4	Asian Core Program Lectureship Award (selected by the coordinator of Taiwan)	大学院工学研究科教授	石原 一彰	
H26.12. 4	Asian Core Program Lectureship Award (selected by the coordinator of China)	大学院理学研究科准教授	山口潤一郎	
H26.12. 4	Asian Core Program Lectureship Award (selected by the coordinator of Thailand)	大学院理学研究科准教授	山口潤一郎	
H26.12. 9	平成26年度日本政府観光局（JNTO） 国際会議誘致・開催貢献賞	情報戦略室教授	森 健策	第16回コンピュータ医用画像処理ならび にコンピュータ支援治療支援に関する国際 会議実行委員会として受賞
H26.12.10	中部建築協議会 第46回中部建築賞 入賞	大学院工学研究科助教	太幡 英亮	
H26.12.11	大学 ICT 推進協議会 2013年度年次大会 優秀論文賞	情報基盤センター教授	外山 勝彦	福田 薫（国際部国際企画課）、 野田昭彦（国際部国際企画課長）と連名
H26.12.11	クロマトグラフィー科学会 学会賞	大学院工学研究科教授	馬場 嘉信	
H26.12.12	FA 財団 平成26年度論文賞	大学院工学研究科教授	社本 英二	センジャル・ブラック（大学院工学研究科 特任助教）、鈴木教和（大学院工学研究科准 教授）と連名
H26.12.13	武見奨励賞	大学院医学系研究科教授	加藤 昌志	

事務職員・技術職員

受賞日	受賞名	受賞者の所属・職名	受賞者	備考
H26.10. 1	第75回応用物理学会秋季学術講演会 The 75th JSAP Autumn Meeting, 2014 Poster Award	全学技術センター 技術専門員	高田 昇治	後藤元信（大学院工学研究科教授）と連名

学生

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H25.12. 1	画像符号化シンポジウム 第18回映像メディア処理シンポジウム 学生論文賞	大学院工学研究科 M2	大橋 一輝	
H26. 5.30	第63回高分子学会年次大会 高分子学会 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 M2	富田 裕介	

受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H26. 6.10	第17回理論化学討論会 優秀ポスター賞	大学院情報科学研究科 D3	鈴木 雄一	小谷野哲之 (大学院情報科学研究科博士研究員)、長岡正隆 (大学院情報科学研究科教授) と連名
H26. 6.17	Springer International Award, for A Young Scientist 2nd AWEST2014	大学院理学研究科 D1	長嶋 宏樹	
H26. 6.29	The WET Excellent Presentation Award	大学院工学研究科 D2	肖 智興	
H26. 7. 5	ESD 大学生リレーシンポジウム 第4回「経済と持続可能性」 ESD プレゼンテーション賞	大学院環境学研究科	竹内恒夫ゼミ	
H26. 7. 5	ESD 大学生リレーシンポジウム 第4回「経済と持続可能性」 ESD リサーチ賞	大学院環境学研究科	竹内恒夫ゼミ	
H26. 7.13	生物工学若手研究者の集い (若手会) 夏のセミナー2014 優秀ポスター賞	大学院創薬科学研究科 D1	河合 駿	
H26. 7.14	名古屋大学学術奨励賞	大学院工学研究科 D3	佐々木寛人	
H26. 7.21	Termination Competition 2014 3位 (the Organization Committee of the Termination Competition 2014)	大学院情報科学研究科 D3	山田 晃久	坂部俊樹 (大学院情報科学研究科教授)、他1名と連名
H26. 7.23	日本機械学会 熱工学コンファレンス2013 若手優秀講演フェロー賞	大学院工学研究科 D3	西川原理仁	
H26. 8. 1	2014年度 日本生物工学会中部支部例会 支部長賞	大学院工学研究科 D3	佐々木寛人	
H26. 8. 6	名古屋大学若手研究者サイエンスフォーラム 総長賞	大学院情報科学研究科 M2	宮地 美希	
H26. 8.22	第107回日本繁殖生物学会大会・優秀発表賞	大学院生命農学研究科 M2	加藤 雅大	他9名と連名
H26. 8.22	Future Ferroelectrics 2014 Presentation Award	大学院理学研究科 M1	永井 隆之	
H26. 9. 4	日本酸化ストレス学会 八木記念学術奨励賞	大学院医学系研究科 D4	山下 享子	
H26. 9. 4	電気学会 平成26年電子・情報・システム部門 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 M1	佐々木勇介	
H26. 9. 5	FIT 運営委員会 FIT2014 第13回情報科学技術フォーラム FIT 奨励賞	大学院工学研究科 M1	加納 隼人	
H26. 9. 6	高分子学会東海支部 学生研究奨励賞	大学院工学研究科 D3	林 幹大	
H26. 9. 6	高分子学会東海支部 学生研究奨励賞	大学院工学研究科 M1	大野 真穂	
H26. 9. 9	日本セラミックス協会 第27回秋季シンポジウム 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 M2	高木 陽介	
H26. 9. 9	日本セラミックス協会 第27回秋季シンポジウム 優秀ポスター賞	大学院理学研究科 M1	前田 悠作	
H26. 9.10	Best Poster Award, International ERATO Higashiyama Live-Holomics Symposium 2014 "Plant Live-Cell Imaging and Microdevices"	大学院工学研究科 M2	小山 諒	安井隆雄 (大学院工学研究科助教)、加地範匡 (大学院工学研究科准教授)、馬場嘉信 (大学院工学研究科教授) と連名
H26. 9.10	第2回バイオ関連化学シンポジウム 若手フォーラム ポスター賞	大学院理学研究科 M1	中島 彩夏	
H26. 9.14	日本地質学会第121年学術大会 優秀ポスター賞	大学院環境学研究科 M1	河原 弘和	ウォリス・サイモン・リチャード (大学院環境学研究科教授)、永治方敬 (大学院環境学研究科 D2) と連名
H26. 9.16	Student Travel Award, The 16th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology	大学院教育発達科学研究科 D3	加藤 仁	
H26. 9.16	第66回日本生物工学会 セルプロセスング計測評価研究部会 優秀学生発表賞	大学院創薬科学研究科 M1	堀川 美希	
H26. 9.17	化学工学会第45回秋季大会 バイオ部会優秀ポスター賞	大学院工学研究科 D3	佐々木寛人	
H26. 9.18	有機合成化学協会 第31回有機合成化学セミナー ポスター賞	大学院工学研究科 D2	林 裕樹	ウヌヤク・ムハメット (大学院工学研究科助教)、石原一彰 (大学院工学研究科教授) と連名
H26. 9.18	環境科学会2014年会 学部生・高専生・高校生等の部 優秀発表賞 (富士電機賞)	工学部 4年	佐藤 大起	
H26. 9.18	環境科学会2014年会 修士課程学生の部 優秀発表賞 (富士電機賞)	大学院環境学研究科 M1	山口 真	越智俊介 (大学院環境学研究科 M1)、田野 (大学院環境学研究科 M1)、島山岳大 (大学院環境学研究科 M1)、他4名と連名
H26. 9.19	化学工学会 第46回秋季大会環境部会 優秀学生発表賞	大学院工学研究科 M2	鈴木 拓馬	
H26. 9.20	第75回応用物理学会秋季学術講演会「第4回 JSAP PHOTO CONTEST」最優秀賞	大学院工学研究科 D2	チョン・ビョンオ	
H26. 9.20	社会情報学会 2013年度学会大会研究発表優秀賞	大学院情報科学研究科 D2	福安 真奈	

受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H26. 9.24	KJF-ICOME 2014 POSTER AWARD	大学院工学研究科 M2	西尾 聡志	田中久暁 (大学院工学研究科助教)、伊東 裕 (大学院工学研究科准教授)、黒田新一 (大学院工学研究科教授) と連名
H26. 9.25	Best Presentation Award, The 9th International Symposium on the Natural Radiation Environment	大学院工学研究科 M1	矢島加奈子	
H26. 9.25	日本塑性加工学会 平成26年度塑性加工春季講演会 優秀論文講演奨励賞	大学院工学研究科 M2	竹中 亮介	
H26. 9.25	From-Carbon-Rich Molecules to Carbon-Based Materials ポスター賞	大学院理学研究科 D3	前川 健久	
H26. 9.26	日本トライボロジー学会 第5回トライボロジー秋の学校 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 M1	市村 和之	
H26. 9.26	日本トライボロジー学会 第5回トライボロジー秋の学校 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 M1	柴沢 穂高	
H26. 9.27	Young Investigator's Award, The 7th KOREA-JAPAN Joint Meeting on Medical Physics	大学院医学系研究科 M1	奥村 聡	
H26. 9.28	The 12th International Symposium on Cytochrome P450 Biodiversity and Biotechnology Best Poster Award	大学院理学研究科 M1	小野田浩宜	
H26. 9.29	スケジューリング学会 スケジューリング・シンポジウム2013 学術賞	大学院工学研究科 M2	岩澤 宏紀	今堀慎治 (大学院工学研究科准教授) と連名
H26. 9.29	スケジューリング学会 スケジューリング・シンポジウム2013 奨励賞	大学院情報科学研究科 M2	深津 翔	
H26. 9.30	2014年度第11回日本熱電学会学術講演会講演奨励賞 (ポスター発表の部)	大学院工学研究科 M2	鶴田 一樹	
H26.10. 3	化学とマイクロ・ナノシステム学会 第30回研究会 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 D3	早川 健	
H26.10. 9	日本航空宇宙学会 第52回飛行機シンポジウム 学生優秀講演賞	大学院工学研究科 M1	立花 将規	
H26.10.11	日本農芸化学会中部支部学術奨励賞	大学院創薬科学研究科 M1	岡 駿佑	
H26.10.12	光化学協会 2014年光化学討論会優秀学生発表賞 (ポスター)	大学院工学研究科 M1	栗原 綾子	
H26.10.15	平成26年度 JB 論文賞	大学院理学研究科 D2	竹川 宜宏	
H26.10.16	2014年度日本木材学会中部支部大会優秀発表賞	大学院生命農学研究科 M2	稲継 実栗	山本浩之 (大学院生命農学研究科教授)、吉田正人 (大学院生命農学研究科准教授)、松尾美幸 (大学院生命農学研究科助教)、他4名と連名
H26.10.17	8th i-CIPEC International Conference Outstanding Oral Presentation	大学院工学研究科 D3	松井 俊介	窪田光宏 (大学院工学研究科助教)、松田仁樹 (大学院工学研究科教授) と連名
H26.10.17	8th i-CIPEC International Conference Outstanding Poster	大学院工学研究科 M2	長野 泰久	佐藤大輔 (大学院工学研究科 M1)、窪田光宏 (大学院工学研究科助教)、松田仁樹 (大学院工学研究科教授) と連名
H26.10.18	産業教育委員会桐原賞	大学院教育発達科学研究科 D3	坂本 学之	
H26.10.18	日本生化学会若手優秀発表賞	大学院創薬科学研究科 M1	谷 優治	
H26.10.18	日本混相流学会 混相流シンポジウム2014 学生優秀講演賞	大学院情報科学研究科 M2	石黒 幸広	
H26.10.18	第87回日本生化学会大会 若手優秀発表賞	大学院生命農学研究科 D2	呉 迪	北島 健 (生物機能開発利用研究センター教授)、佐藤ちひろ (生物機能開発利用研究センター准教授) と連名
H26.10.19	第59回口腔外科学会総会・学術大会 優秀口演発表賞	大学院医学系研究科 D3	椋村有紀子	片桐 渉 (医学部附属病院助教)、大杉将嗣 (医学部附属病院医員)、日比英晴 (大学院医学系研究科准教授)、他4人と連名
H26.10.19	第59回口腔外科学会総会・学術大会 優秀ポスター賞	大学院医学系研究科 D2	山口 聡	山本憲幸 (大学院医学系研究科助教)、石川 純 (大学院医学系研究科 D 2)、山本朗仁 (大学院医学系研究科准教授)、他6人と連名
H26.10.19	第59回口腔外科学会総会・学術大会 優秀ポスター賞	大学院医学系研究科 D2	平田真里奈	山本朗仁 (大学院医学系研究科准教授)、服部 宇 (医学部附属病院講師)、松下嘉泰 (大学院医学系研究科 D 4)、他3人と連名
H26.10.21	Young Research Poster Award, The 7th Forum on the Science and Technology of Silicon Materials 2014	大学院工学研究科 M1	平松 巧也	

受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H26.10.25	Best Poster Award, The 14th AOCMP/ 12th SEACOMP 2014 Congress	大学院医学系研究科 M2	山崎 美咲	
H26.10.26	The Best Presentation Award, The First International Conference of International Alliance for Sustainable Urbanization and Regeneration (IASUR) "Sustainable Society as Our Challenge"	大学院環境学研究科 M1	渡邊 真理	他1名と連名
H26.10.28	Best Student Paper Award, 2014 Japan-Korea Joint Workshop on Complex Communication Sciences (JKCCS2014)	大学院工学研究科 D3	ハン・ギョウキ	
H26.10.28	The 9th AMF-AMEC-2014 Excellent Poster Awards	大学院工学研究科 M2	高木 陽介	
H26.10.29	日本大気化学会 第20回大気化学討論会 学生優秀発表賞	大学院環境学研究科 M1	中根 令以	
H26.10.31	Molecular Chirality Asia 2014 Poster Award	大学院工学研究科 M1	間宮 文彦	
H26.10.31	Poster Award, 10th International Conference on Separation Science and Technology (ICSST2014)	大学院工学研究科 M1	児玉 祥子	神田英輝 (大学院工学研究科助教)、 後藤元信 (大学院工学研究科教授) と連名
H26.10.31	Poster Award, 10th International Conference on Separation Science and Technology (ICSST2014)	工学部 4年	伊藤 望夏	根路銘葉月 (大学院工学研究科 D3)、 神田英輝 (大学院工学研究科助教)、 後藤元信 (大学院工学研究科教授) と連名
H26.11. 1	第76回日本血液学会学術集会 優秀ポスター賞	大学院医学系研究科 M2	中村 友紀	
H26.11. 5	日本金属学会 第一部門 World Materials Day Award 部門賞	大学院工学研究科 M2	鈴木 飛鳥	中村祐貴 (大学院工学研究科 M2)、 森本慎平 (大学院工学研究科 M1) と連名
H26.11. 6	第106回有機合成シンポジウム 優秀ポスター賞	大学院生命農学研究科 M2	木村 梨乃	
H26.11. 7	第106回有機合成シンポジウム 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 D1	山下 賢二	水野麻依 (大学院工学研究科 M1)、 波多野学 (大学院工学研究科准教授)、 石原一彰 (大学院工学研究科教授) と連名
H26.11. 7	日本流体力学会中部支部 第12回日本流体力学会 中部支部講演会優秀賞	大学院工学研究科 M2	丹波 高裕	ファン・フォアン・ソン (工学部研究生)、 正田達郎 (大学院工学研究科 M1)、 岩川 輝 (大学院工学研究科助教)、 佐宗章弘 (大学院工学研究科教授) と連名
H26.11.10	日本化学会 第4回 CSJ 化学フェスタ2014 最優秀ポスター発表賞	大学院工学研究科 D2	小倉 義浩	
H26.11.10	日本化学会 第4回 CSJ 化学フェスタ2014 最優秀ポスター発表賞	大学院工学研究科 D2	原 良行	
H26.11.10	日本化学会 第4回 CSJ 化学フェスタ2014 優秀ポスター発表賞	大学院工学研究科 D2	今川 直道	
H26.11.10	日本化学会 第4回 CSJ 化学フェスタ2014 優秀ポスター発表賞	大学院工学研究科 D1	山下 賢二	
H26.11.10	日本化学会 第4回 CSJ 化学フェスタ2014 優秀ポスター発表賞	大学院工学研究科 M2	宮治 久宜	
H26.11.10	日本化学会 第4回 CSJ 化学フェスタ2014 優秀ポスター発表賞	大学院工学研究科 M1	服部 篤紀	
H26.11.11	Poster Award, The 6th China-Japan Symposium on Ferroelectric Materials and Their Applications	大学院工学研究科 M2	田中 良典	
H26.11.12	Best Poster Award, IEEE 2014 International Symposium on Micro-Nano Mechatronics and Human Science (MHS2014)	大学院工学研究科 M1	ソン ウォンイ	益田泰輔 (大学院工学研究科助教)、 新井史人 (大学院工学研究科教授) と連名
H26.11.13	第29回画像符号化シンポジウム 第2回ポスターセッション ベストポスター賞	大学院工学研究科 M1	宮城 雄介	
H26.11.13	第28回分子シミュレーション討論会 学生優秀発表賞	大学院情報科学研究科 D3	鈴木 雄一	小谷野哲之 (大学院情報科学研究科博士 研究員)、長岡正隆 (大学院情報科学研究科 教授) と連名
H26.11.14	プラスチック成形加工学会 第22回秋季大会 (成形加工シンポジア'14新潟) ポスター賞	大学院工学研究科 M2	山東 史典	
H26.11.14	電子スピンの学会学生優秀研究賞	大学院理学研究科 D1	長嶋 宏樹	
H26.11.14	電子スピンの学会学生優秀研究賞	大学院理学研究科 M2	越沼 涉	
H26.11.15	計測自動制御学会 平成26年度 SICE 中部支部 若手研究発表会 奨励賞	大学院工学研究科 M1	岩永 圭弘	豊浦貴充 (大学院工学研究科 M2) と連名
H26.11.15	G空間 EXPO 学生フォーラム2014 ベストポスター・プレゼン賞	大学院環境学研究科 M1	青柳淳之介	
H26.11.16	電子スピンの学会優秀発表賞	大学院理学研究科 D1	長嶋 宏樹	

受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H26.11.16	International EPR (ESR) Society ポスター賞	大学院理学研究科 M2	越沼 渉	
H26.11.20	日本鉄鋼協会東海支部・日本金属学会東海支部 第24回学生による材料フォーラム 奨励賞	大学院工学研究科 M2	三輪田結理	
H26.11.21	日本航空宇宙学会 第51回中部・関西支部合同 秋期大会 最優秀学生賞	大学院工学研究科 D3	鶴田 久	オウ・チョウエン (大学院工学研究科 M2)、 ワン・ビン (大学院工学研究科研究員)、 佐宗章弘 (大学院工学研究科教授) と連名
H26.11.21	日本航空宇宙学会 第51回中部・関西支部合同 秋期大会 中部支部学生賞	大学院工学研究科 M2	片岡 久志	鶴生知輝 (大学院工学研究科 M2)、 市原大輔 (大学院工学研究科 D1)、 岩川 輝 (大学院工学研究科助教)、 佐宗章弘 (大学院工学研究科教授)、 と連名
H26.11.22	CSIS DAYS 2014優秀研究発表賞	大学院環境学研究科 M1	猪原 暁	杉本賢二 (大学院環境学研究科研究員)、 加藤博和 (大学院環境学研究科准教授)、 林 良嗣 (大学院環境学研究科教授)、 他1名と連名
H26.11.28	宇宙航空研究開発機構 第11回航空機による学生無重力実験コンテスト 優秀賞		名古屋大学 推進エネルギー システムグループ	松田雄太 (大学院工学研究科 M2)、 福嶋一貴 (大学院工学研究科 M2)、 常 新雨 (大学院工学研究科 M1)、 他1名と連名
H26.11.28	第28回日本マイクログラフィティ応用学会 学術講演会毛利ポスターセッション 優秀賞	大学院工学研究科 M2	松田 雄太	福嶋一貴 (大学院工学研究科 M2)、 常 新雨 (大学院工学研究科 M1)、 長野方星 (大学院工学研究科准教授) と 連名
H26.12. 5	IPC 2014 Young Scientist Poster Award, the 10th SPSJ International Polymer Conference	大学院工学研究科 D2	内山 峰人	
H26.12. 5	IPC 2014 Young Scientist Poster Award, the 10th SPSJ International Polymer Conference	大学院工学研究科 D2	土肥 侑也	
H26.12. 8	高分子学会 第45回中部化学関係学協会支部 連合秋季大会 東海高分子優秀学生発表賞	大学院工学研究科 M2	宮治 久宜	
H26.12. 8	高分子学会 第45回中部化学関係学協会支部 連合秋季大会 東海高分子優秀学生発表賞	大学院工学研究科 M1	日置 尚悟	

* 受賞者の所属・職名又は学年は、受賞当時

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成26年11月16日～12月15日]

記事	月日	新聞等名
1 ナゾ謎かがく：青色 LED を開発した日本人研究者が今年のノーベル物理学賞受賞	11.16 (日)	日経 (朝刊)
2 青色 LED 世界称賛 名大、自由な校風の産物	11.17 (月)	日経 (朝刊)
3 鶴舞キャンパスで新研究棟の完成記念式典が開催され濱口総長は「次の百年に期待している」と語る	11.17 (月)	中日 (朝刊)
4 文部科学省の「科学技術人材育成のコンソーシアムの構築事業」で北海道大学が代表機関で本学が共同実施機関の 事業が採択される	11.17 (月)	日刊工業
5 備える3.11から：教えて、センセイ！ 無理な消火やめ避難を 廣井 悠滅災連携研究センター准教授	11.17 (月)	中日 (朝刊)
6 本学やトヨタ自動車株式会社など産学官が連携し「あいちロボット産業クラスター推進協議会」を設立	11.17 (月)	読売
7 モノづくり推進シンポジウム「3D プリンティングが拓く次世代モノづくりのあり方」開催：10月17日 田中智久工 学研究科准教授が講演	11.18 (火)	日刊工業
8 第2回大学文書資料室シンポジウム「今、なぜ大学史かーその意義と展望ー」開催：26日	11.18 (火)	中日 (朝刊)
9 特別講演会「祖父為三郎の芸術への想いー古川美術館の収蔵品からー」開催：19日 博物館で行われる	11.18 (火)	中日 (朝刊)
10 日本経済団体連合会会長榊原定征氏本学卒業生が東海地方経済懇談会に出席	11.18 (火)	読売 中日 (朝刊)
11 第4回名古屋大学社会イノベーションデザイン学センター (SIDC) シンポジウム「聴ける、触れるイノベーション」 開催：12月4日	11.19 (水)	日刊工業
12 数理ウェブ：22日 多元数理科学棟で行われる	11.19 (水)	中日 (朝刊)
13 第19回博物館特別展「絹谷幸太 創知彫刻」開催：7月24日～11月29日	11.19 (水)	朝日 (夕刊)
14 国際シンポジウム「デジタル・ストーリーテリングの可能性・つながりを構築するメディア実践の未来」開催：30 日 文系総合館7階で行われる	11.19 (水) 11.21 (金)	毎日 (朝刊) 中日 (朝刊)
15 はやぶさ2 受け継ぐ夢：渡邊誠一郎環境学研究科教授は「持ち帰られる物質の分析を通じて、どのように生命の準備 が行われたか明らかにしたい」と語る	11.20 (木)	朝日 (朝刊)
16 深層断面：未来のノーベル賞候補育成 赤崎 勇本学特別教授と天野 浩工学研究科教授がノーベル物理学賞を受賞し た青色 LED の研究について	11.20 (木)	日刊工業
17 「シュトイデ・カルテット レクチャーコンサート」開催：25日 濱口総長が「一流の演奏家に教わると、学生がみ るみる成長していくのが分かる。素晴らしい教育のあり方を、芸術を通してわれわれも体験できる」と語る	11.20 (木)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成26年11月16日～12月15日]

記事	年月日	新聞等名
18 ヘラルドグループ創業者の故古川為三郎氏、志ま氏夫妻の寄付で造られた本学の旧図書館（現古川記念館・博物館）が設立50周年を迎えたのを記念し、本学が古川美術館に「ざざれ石」を贈った	11.20 (木)	中日 (朝刊)
19 長谷川好規医学系研究科教授と共同で研究し発見した肺がん患者の尿が含む分子を元にパナソニック株式会社が吐く息が含む微量の生体ガスで肺がんを検査する技術を開発	11.20 (木)	日経 (夕刊)
20 赤崎 勇本学特別教授と天野 浩工学研究科教授などノーベル物理学賞を受賞した3人で「LED」の文字をつくる人形が神戸・異人館「うろこの家」に取り付けられた	11.20 (木)	中日 (夕刊) 朝日 (夕刊)
21 名古屋大学レクチャー2014開催：12月6日 水田 洋本学名誉教授と理化学研究所新興・再興感染症研究ネットワーク推進センター長永井美之本学名誉教授が講演	11.20 (木) 12. 7 (日)	中日 (朝刊) 中日 (朝刊)
22 本学が2015年度学生募集要項を発表	11.21 (金)	中日 (朝刊)
23 ノーベル賞受賞者を囲むフォーラム「次世代へのメッセージ」開催：20日 1973年にノーベル物理学賞を受賞した横浜薬科大学長江崎玲奈氏が赤崎 勇本学特別教授と天野 浩工学研究科教授などがノーベル物理学賞を受賞したことについて「生活の役に立つ分野の業績が評価され、うれしい」と語る	11.21 (金)	読売
24 持続可能な明日を考えるシンポジウム「いのちつながるまちづくり・担い手づくり」開催：27日 杉山範子環境学研究科特任准教授と中日新聞論説委員が対談	11.21 (金)	中日 (朝刊)
25 本学や九州大学、農業生物資源研究所などの研究グループはトビイロウカに幅広い抵抗性を有するイネの遺伝子を特定	11.21 (金)	科学新聞
26 本学や東京大学など RU11は先端研究支援のための基盤強化と若手研究者の雇用安定を求める提言を発表	11.21 (金)	科学新聞
27 天野 浩工学研究科教授がスウェーデン大使館で行われたノーベル賞受賞祝賀会に出席	11.22 (土)	中日 (朝刊) 他2社
28 鷺谷 威減災連携研究センター教授は22日に発生した長野県北部の地震について「余震が糸魚川―静岡構造線に沿って起きており、詳しく調べる必要がある」と語る	11.23 (日)	読売
29 西澤泰彦環境学研究科教授は全焼した「鳥久」について「江戸と明治、両時代の様子を伝え、堀川沿いの料亭文化を物語る」と語る	11.23 (日)	朝日 (朝刊)
30 ノーベル賞学者続々 名大3 (自由な学風、地道な研究、地元愛) 旋風	11.24 (月)	日経 (朝刊)
31 山田清文医学部附属病院薬剤師教授などの研究グループは脳の海馬にある「ガーディン」がリンと結合することで、記憶が形成、維持されていることをマウスを使った実験で突き止めた	11.24 (月) 12. 5 (金)	毎日 (朝刊) 科学新聞
32 佐宗章弘工学研究科教授は三菱重工業株式会社と共同で宇宙での大量輸送を目的とした新方式の電気ロケットエンジン「ヘリコン静電加速推進機」の作動実証に成功	11.24 (月)	日刊工業
33 山岡耕春環境学研究科教授は22日に発生した長野県北部の地震について「今回の震源付近は比較的地震のおきやすい場所と言える」と語る	11.24 (月)	毎日 (朝刊)
34 クローズアップ2014:30日打ち上げ「はやぶさ2」渡邊誠一郎環境学研究科教授は「単に小惑星を知るのではなく、得られたデータから地球がどう生まれ、生命を育む星になったのかという歴史を明らかにする探査だ」と語る	11.25 (火)	毎日 (朝刊)
35 核といのちを考える 被爆国から2014秋①：科学の悪用許さず 益川敏英本学特別教授	11.25 (火)	朝日 (夕刊)
36 天野 浩工学研究科教授がノーベル物理学賞を受賞した研究生活について「自由な研究環境にあったことがよかった」と述べたことが取り上げられる	11.26 (水)	日刊工業
37 光の軌跡-2014ノーベル物理学賞①：へこたれぬ薩摩男児 赤崎 勇本学特別教授	11.26 (水)	中日 (朝刊)
38 耕論：何のための英語入試改革「読む」1技能でも研究深めた 益川敏英本学特別教授	11.26 (水)	朝日 (朝刊)
39 はやぶさ2 民間の技 渡邊誠一郎環境学研究科教授が「探査機には研究者だけではなく、メーカーの皆さんの力が結集されている」と語る	11.26 (水)	毎日 (夕刊)
40 本学の能楽サークル「観世会」が創部50周年を迎えた	11.26 (水)	中日 (夕刊)
41 光の軌跡-2014ノーベル物理学賞②：遊びにも論理的思考 天野 浩工学研究科教授	11.27 (木)	中日 (朝刊)
42 赤崎 勇本学特別教授と天野 浩工学研究科教授が執筆したノーベル賞に関係した論文を応用物理学会で公開	11.27 (木)	朝日 (朝刊)
43 「はやぶさ2」30日打ち上げへ 日欧の着陸機4機搭載 渡邊誠一郎環境学研究科教授は「探査は機体の開発だけでなく、打ち上げ後の運用がカギを握る」と語る	11.27 (木)	毎日 (朝刊)
44 鈴木康弘減災連携研究センター教授は22日に発生した長野県北部地震の断層について「信州大学のチームの調査と合わせると断層の長さは少なくとも6キロになる」と語る	11.27 (木)	朝日 (朝刊)
45 本学は小池和男氏元本学教授に特別教授の称号を授与したと発表	11.27 (木)	中日 (朝刊)
46 天野研のあした④：広がる世界 みんなで討論 本田善央工学研究科准教授は研究室の全員で討論する場を設けて話し合うことについて「1人では浮かばなかった新しい考えが浮かび、考える力もついた」と語る	11.28 (金)	朝日 (朝刊)
47 本学は日経 BP コンサルティングの「大学ブランドイメージ調査2014-2015」で前年に続き1位になった	11.28 (金)	日経 (朝刊)
48 光の軌跡-2014ノーベル物理学賞③：手作り装置で荒野へ 赤崎 勇本学特別教授、天野 浩工学研究科教授	11.29 (土)	中日 (朝刊)
49 天野研のあした⑤：盆栽みたく 地道に研究 久志本真希さん工学研究科博士後期課程2年生は「結晶の成長の方法など、研究室に代々引き継がれるノウハウを継承しなければ」と語る	11.29 (土)	朝日 (朝刊)
50 SMBC コンサルティングは2014年の「ヒット商品番付」を発表し東の横綱に「青色LEDノーベル物理学賞受賞」を選んだ	11.29 (土)	朝日 (朝刊)
51 あいち賢人：名古屋大第9代学長 早川幸男元総長	11.29 (土)	中日 (朝刊)
52 光の軌跡-2014ノーベル物理学賞④：1500回“失恋”情熱結晶 赤崎 勇本学特別教授、天野 浩工学研究科教授	11.30 (日)	中日 (朝刊)
53 天野研のあした⑥：結晶づくり 留学で刺激 光成 正さん工学研究科博士後期課程3年生は「いろんな国の人と困難な課題を達成して、信頼関係を築きたい」と語る	11.30 (日)	朝日 (朝刊)
54 大場裕一生命農学研究科助教はサクラエビが青く光る姿をカラーで撮影することに成功	11.30 (日)	中日 (朝刊)
55 「第1回 NEDO パワーエレクトロニクスシンポジウム」開催：11月28日 天野 浩工学研究科教授が講演し「エネルギー事情を考えれば、パワーデバイスのさらなる高効率化が必要だ」と語る	12. 1 (月)	日刊工業
56 光の軌跡-2014ノーベル物理学賞⑤：輝きは無限の可能性 赤崎 勇本学特別教授、天野 浩工学研究科教授	12. 1 (月)	中日 (朝刊)
57 はやぶさ2 謎解き旅へ 渡邊誠一郎環境学研究科教授は「地球の生命がどうやって生まれたのか。科学の究極の目標を解明する手掛かりが得られるんじゃないかと考えている」と語る	12. 1 (月)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成26年11月16日～12月15日]

記事	年月日	新聞等名
58 今年の主なニュースで10月7日に赤崎 勇本学特別教授、天野 浩工学研究科教授がノーベル物理学賞を受賞したことが取り上げられる	12. 2 (火)	読売
59 いまドキッ！大学生：東山の老恐竜像を救え！ 恐竜像の安全評価を行っている阪本早弥奈さん工学研究科1年生について、中村 光同教授は「形状が特殊なために、安全評価に必要なモデル作成には膨大なデータが必要になるが、阪本さんが興味を持ってやってくれた」と語る	12. 2 (火)	中日 (朝刊)
60 南海トラフ広域地震防災研究プロジェクトシンポジウム「昭和東南海地震から70年一次の地震への備えはー」開催：7日 金田義行減災連携研究センター特任教授が講演	12. 3 (水)	日刊工業
61 全国大学ビブリオバトル2014京都決戦開催：14日 河合さやかさん文学部2年生が出演	12. 3 (水)	読売
62 丹羽宇一郎本学名誉博士が講演し「日本は中間層の教育が良いから、良い製品をつくらせて世界の信頼を得ている」と語る	12. 3 (水)	中日 (朝刊)
63 独創の系譜：有機合成「もっと自在に」野依良治本学特別教授がノーベル化学賞を受賞した研究が取り上げられる	12. 4 (木)	毎日 (朝刊)
64 渡邊誠一郎環境学研究科教授は科学担当責任者をつとめる「はやぶさ2」について「(到着予定の) 1999JU3は地上からの観測では一点にしか見えない。着陸地点は事前に計画できず、近づいて表面をよく調べて決めることになる」と語る	12. 4 (木)	朝日 (朝刊)
65 「第20回登校拒否・不登校問題全国をつどい in 愛知」実行委員会準備会開催：6日 教育学部第3講義室で行われる	12. 4 (木)	読売
66 赤崎 勇本学特別教授、天野 浩工学研究科教授が2014年度ノーベル物理学賞を受賞した青色LEDの研究について同賞の選考委員長スウェーデン・チャルマース工科大学教授パー・デルシング氏は「全人類の生活の向上と地球環境の保護に貢献した」と語る	12. 5 (金) 12. 8 (月) 12.11 (木)	読売 毎日 (夕刊) 日経 (朝刊) 朝日 (朝刊)
67 天野 浩工学研究科教授は2014年度ノーベル賞受賞式出席のためスウェーデンに向けて出発する前に中部国際空港で開いた会見で「ノーベル賞をスウェーデンの人がいかに大切にしているか、味わってきたい」と語る	12. 5 (金) 12. 6 (土)	日経 (夕刊) 他3社 読売
68 天野 浩工学研究科教授がノーベル賞受賞式の行われるスウェーデン・ストックホルムに到着	12. 6 (土)	日経 (夕刊) 他2社
69 赤崎 勇本学特別教授は2014年度ノーベル賞受賞式に向け出発する前に開いた会見で「お世話になったいろんな人たちに感謝の気持ちを語りたい」と語る	12. 6 (土)	中日 (朝刊) 他3社
70 「ノーベル・プライズ・ダイアログ・東京2015」開催：3月1日 天野 浩工学研究科教授が講演	12. 6 (土)	読売
71 日経ものづくりリシンポジウム「ものづくりと中部の将来ー日本製造業の復権と大学の役割」開催：5日 濱口総長が赤崎 勇本学特別教授と天野 浩工学研究科教授がノーベル物理学賞を受賞したことについて「師匠の指導のもと、若い世代が自由な発想で研究できた。豊田合成の支援が早期に得られたことも大きい」と語る	12. 6 (土)	日経 (朝刊)
72 真相深層■LEDノーベル賞の研究者を支える陰の主役たち 鬼頭雅弘学術研究・産学官連携推進本部知的財産マネージャー	12. 6 (土)	日経 (朝刊)
73 英文学会クリスマス・セミナー開催：12日 文学部大会議室110室で行われる	12. 6 (土)	朝日 (朝刊)
74 天野 浩工学研究科教授がストックホルムのノーベル博物館を訪れ、受賞者がカフェの椅子の裏にサインするのが恒例となっており、椅子に名前を英語と日本語でサインした	12. 7 (日)	読売 他4社
75 ストーリー：「俺が青く光らせる」ーLED「実験の鬼」の信念 天野 浩工学研究科教授	12. 7 (日)	毎日 (朝刊)
76 病院の実力：大腸がん 医学部附属病院の実績が取り上げられる	12. 7 (日)	読売
77 ドクター井口のほのぼのクリニック 愛知淑徳大学教授井口昭久氏元本学教授	12. 7 (日)	毎日 (朝刊)
78 東南海地震 次はいつか？ 故飯田汲事本学名誉教授の昭和東南海地震の報告書について検証している武村雅之減災連携研究センター寄附研究部門教授は「死者数など実態はおおむね妥当」と語る	12. 7 (日)	日経 (朝刊)
79 天野 浩工学研究科教授がスウェーデン王立科学アカデミーで会見に臨み「青色LEDの発明はとても困難だったが、そこを評価していただいた」と語る	12. 8 (月)	朝日 (朝刊) 他3社
80 天野 浩工学研究科教授が亡き父へ感謝を語る	12. 8 (月)	読売
81 天野 浩工学研究科教授は日本から多くのノーベル賞受賞者が輩出されたことについて「日本のアカデミーは基礎研究に力を入れている、それが要因ではないか」と語る	12. 8 (月)	日経 (朝刊)
82 KEY WORD ノーベル賞受賞式 国別・分野別のノーベル賞の受賞者数 日本人受賞者が21人	12. 8 (月)	日刊工業
83 スーパーグローバル大 37大学 10年計画始動 タイプA (トップ型) 名古屋大学	12. 8 (月)	日経 (朝刊)
84 南海トラフ広域地震防災研究プロジェクトシンポジウム「昭和東南海地震から70年一次の地震への備えはー」開催：7日 福和伸夫減災連携研究センター教授が研究機関と地域住民の交流の場の機能を併せ持った減災館のような施設が必要であると指摘した	12. 8 (月)	読売
85 第76回東海学生駅伝対抗選手権大会：7日 5位 名古屋大学A	12. 8 (月)	中日 (朝刊)
86 論文を書こう 上出洋介本学名誉教授	12. 8 (月)	中日 (夕刊)
87 赤崎 勇本学特別教授と天野 浩工学研究科教授がストックホルム大学で受賞記念講演に臨んだ	12. 9 (火) 12.12 (金)	日経 (朝刊) 他4社 毎日 (朝刊)
88 天野 浩工学研究科教授が祖母 (故人) へ感謝の気持ちを語る	12. 9 (火)	日刊工業
89 この人：ノーベル賞「青色LED」開発を橋渡し 本学と豊田合成株式会社の橋渡しを行った科学技術振興機構上席主任調査員石田秋生氏	12. 9 (火)	中日 (朝刊)
90 ノーベル賞受賞者を囲むフォーラム「次世代へのメッセージ」開催：11月20日 赤崎 勇本学特別教授と天野 浩工学研究科教授のメッセージが紹介される	12. 9 (火)	読売
91 第12回学生フォーミュラ大会で総合優勝したフォーミュラチーム「FEM」が連覇を狙う	12. 9 (火)	中日スポーツ
92 天野 浩工学研究科教授は記念講演後『若い人をいかに励ますかだけ』を目的に登壇した」と語る	12. 9 (火)	中日 (夕刊)
93 スtockホルムの大手新聞2紙が天野 浩工学研究科教授の特集記事を掲載	12. 9 (火)	毎日 (夕刊)
94 本学と豊田合成株式会社の橋渡しを行った科学技術振興機構上席主任調査員石田秋生氏が赤崎 勇本学特別教授の記念講演について「簡潔に窒化ガリウム研究の歴史を語られた。さすがに青色LEDのバイオニアですね」と語る	12. 9 (火)	日経 (夕刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成26年11月16日～12月15日]

記事	月日	新聞等名
95 医人伝：大垣市民病院呼吸器内科部長安藤守秀氏本学卒業生	12. 9 (火)	中日 (朝刊)
96 天野 浩工学研究科教授と共にストックホルムのノーベル博物館を訪れた赤崎 勇本学特別教授がカフェの椅子に名前を英語と日本語でサインした	12.10 (水)	毎日 (朝刊) 他4社
97 ノーベル賞受賞者を歓迎する恒例のコンサートを赤崎 勇本学特別教授と天野 浩工学研究科教授が鑑賞	12.10 (水)	毎日 (朝刊)
98 天野 浩工学研究科教授がスウェーデンのストックホルム郊外にある IT 産業の集積地「シスタ・サンエンスシティ」を訪れた	12.10 (水)	日経 (朝刊)
99 赤崎 勇本学特別教授をバックアップする世話役の元在日スウェーデン大使館職員カイ・レイニウス氏と氏の妻豊子氏	12.10 (水)	日刊工業
100 博物館特別展「2014年ノーベル物理学賞青色 LED の開発研究」開催：12月9日～4月11日	12.10 (水)	読売
101 中嶋哲彦教育発達科学研究科教授は学校別に学力調査結果を公表していることについて「学校別の平均正答率まで公表する前に、課題が見つかった学校や困窮家庭の子への支援が先決だ」と語る	12.10 (水)	朝日 (朝刊)
102 天野 浩工学研究科教授が授賞式に続いて行われる晩餐会でスウェーデン王妃の隣の席となることが決まった	12.10 (水)	中日 (夕刊)
103 天野 浩工学研究科教授が1年ぶりに家族で集まり晴れ舞台を祝う	12.10 (水)	毎日 (夕刊)
104 憂楽帳：天野 浩工学研究科教授が大学院生時代に奨学金を受けていたことについて「ものすごく助かりました」と語る	12.10 (水)	毎日 (夕刊)
105 赤崎 勇本学特別教授との協力で青色 LED を事業化した豊田合成株式会社社長荒島 正氏が記念講演について「大変立派だった。3人とも個性がある」と語る	12.10 (水)	日経 (夕刊)
106 赤崎 勇本学特別教授と天野 浩工学研究科教授の実験の機材を提供した元豊田中央研究所橋本雅文氏が紹介される	12.10 (水)	中日 (夕刊)
107 ノーベル賞授賞式の地元スウェーデンのファンが天野 浩工学研究科教授にサインをもらい「本当に親切で良い男だった」と語る	12.10 (水)	朝日 (夕刊)
108 赤崎 勇本学特別教授と天野 浩工学研究科教授がノーベル賞授賞式に出席	12.11 (木)	中日 (朝刊) 他5社
109 ノーベル物理学賞 受賞3氏の功績 赤崎 勇本学特別教授「窒化ガリウム」天野 浩工学研究科教授「結晶装置」	12.11 (木)	読売
110 本学と豊田合成株式会社の橋渡しを行った科学技術振興機構上席主任調査員石田秋生氏も受賞者の栄誉を祝福	12.11 (木)	毎日 (朝刊)
111 オアシス21のシンボル「水の宇宙船」やテレビ塔がノーベル賞受賞を記念し青色 LED の点灯でお祝いムードを演出した	12.11 (木)	日経 (朝刊) 他2社
112 文学研究科長・文学部長に佐久間淳一教授を選出	12.11 (木)	中日 (朝刊)
113 赤崎 勇本学特別教授は11日に帰国の途につき天野 浩工学研究科教授は16日に帰国予定	12.11 (木)	毎日 (夕刊)
114 ノーベル賞授賞式で赤崎 勇本学特別教授と天野 浩工学研究科教授を支えた家族の笑顔も輝いた	12.11 (木)	中日 (夕刊)
115 赤崎 勇本学特別教授と天野 浩工学研究科教授の共通点は努力家	12.11 (木)	南日本新聞
116 赤崎 勇本学特別教授と天野 浩工学研究科教授は独自の視点で省エネルギー推進	12.11 (木)	南日本新聞
117 赤崎 勇本学特別教授 ノーベル物理学賞祝賀記念企画 コバルトブルーの輝きは未来を照らしている	12.11 (木)	南日本新聞
118 「光跡」継ぐ名古屋の地 研究に王道なし 赤崎 勇本学特別教授	12.11 (木)	南日本新聞
119 赤崎 勇本学特別教授と天野 浩工学研究科教授が授賞式を終え、メダルを手に記念撮影を行った	12.11 (木)	毎日 (夕刊) 他3社
120 検証2014：LEDにノーベル賞 モノづくり魂 結実 世界に先駆け「青色」製品化	12.12 (金)	日刊工業
121 新田英之理学研究科特任講師は赤崎 勇本学特別教授と天野 浩工学研究科教授のように「今の若手からノーベル賞受賞者を出すのは難しい」と語る	12.12 (金)	朝日 (夕刊)
122 梶原義実文学研究科准教授は東山キャンパス内で古墳時代から鎌倉時代初期にかけての窯跡の発掘調査が続けられていることについて「東海地方をはじめ全国各地の遺跡で見つかった焼き物とを、より正確に比べられるようになった」と語る	12.12 (金)	中日 (朝刊)
123 天野 浩工学研究科教授がスウェーデンのカール16世グスタフ国王主催の晩餐会に出席	12.12 (金)	中日 (夕刊) 日経 (夕刊)
124 天野 浩工学研究科教授がノーベルウィークの閉会レセプションに参加	12.13 (土)	読売 毎日 (夕刊)
125 赤崎 勇本学特別教授がスウェーデンから帰国し会見を開き、ノーベル物理学賞のメダルを披露	12.13 (土)	日経 (朝刊) 他3社
126 赤崎 勇本学特別教授と 和行物質科学国際研究センター特任教授が日本学士院新会員に選ばれた	12.13 (土)	読売 他3社
127 医学部附属病院が臨床試験などに重点を置いた「最先端医療機能強化棟」の建設を計画していることが分かったと報じられた	12.13 (土)	中日 (朝刊)
128 「中根」の目 データが語る：民間企業との共同研究費受け入れ額 7位 名古屋大学	12.13 (土)	毎日 (朝刊)
129 天野 浩工学研究科教授が行きつけの居酒屋で青色 LED にちなんで特製カクテル「天野ブルー」の提供をはじめ代金代わりに募金を呼びかけたところ、約10万円が集まった	12.13 (土)	中日 (夕刊)
130 天野 浩工学研究科教授がノーベルウィークの様々な行事を終え「早く戻って研究を続けている学生と議論をしたい」と語る	12.14 (日)	毎日 朝日 (朝刊)
131 天野 浩工学研究科教授がウブサラ大学で講演	12.14 (日)	読売
132 赤崎 勇本学特別教授と天野 浩工学研究科教授がノーベル物理学賞を受賞したのを記念して稲沢市が「祝ノーベル物理学賞受賞」などと記した懸垂幕を市役所正面玄関に掲げた	12.14 (日)	読売
133 LAST WEEK 先週の出来事：10日ノーベル賞授賞式	12.14 (日)	毎日 (朝刊)
134 本学は超低電圧デバイス技術研究組合などと共同でデータセンター向け固体外部記憶装置用の新型相変化素子「TRAM」を開発	12.15 (月)	日刊工業
135 プレーバック1週間：赤崎 勇本学特別教授と天野 浩工学研究科教授のノーベル賞授賞式	12.15 (月)	朝日 (夕刊)

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

10月8日(水)～1月30日(金)

場 所：附属図書館医学部分館
2階入口ホール

時 間：9:00～20:00(平日)、
13:00～17:00(土曜日)

休 館 日：日・祝日

入 場 料：無料

附属図書館医学部分館第8回ミニ展示会

「医心 絵心—医師たちの画力—」

内 容：愛知医科大学の解剖学者 奈良坂源一郎の博物画、県立愛知医科大学の皮膚科学者 太田正雄(木下奎太郎)の絵画など、解剖図だけでなく、人物、静物、動植物などの多様なモチーフに発揮された先輩医師たちの素晴らしい画力を展示公開する



[問い合わせ先]

附属図書館医学部分館 052-744-2505

11月5日(水)～1月30日(金)、

2月9日(月)～3月25日(水)

場 所：博物館野外観察園
セミナーハウス2階

時 間：10:00～16:00

休 館 日：土・日・祝日

入 場 料：無料

博物館野外観察園セミナーハウス

サテライト展示

テ ー マ：「スノーボールアースから
カンブリア爆発へ」(11/5～1/30)
「写真展—博物館友の会
写真サークル」(2/9～3/25)



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

12月9日(火)～4月11日(土)

場 所：博物館3階ミュージアムサロン

時 間：10:00～16:00

休 館 日：日・月曜日

入 場 料：無料

第20回博物館特別展

「2014年ノーベル物理学賞 青色LEDの開発研究」

[関連特別講演会] (1/31)

場 所：博物館3階講義室

時 間：13:30～15:00

講演題目：「赤崎先生・天野先生 ノーベル物理学賞への軌跡」

講 演 者：竹田美和(本学名誉教授)

参 加 費：無料



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

12月13日(土)～1月31日(土)

場 所：博物館2階展示室

時 間：10:00～16:00

休 館 日：日・月曜日

入 場 料：無料

第29回博物館企画展「野外観察園のボタニカルアート」

[解説：ボタニカルアートの技法]

場 所：博物館2階展示室

時 間：13:30～15:00

テ ー マ：「枝の描き方」(1/21)、「実の描き方」(1/28)

講 師：東海林富子氏

(博物館友の会ボタニカルアートサークル講師)

内 容：講師が実際に絵を描きながら技法について解説する

参 加 費：無料



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

1月22日(木)

場 所：理学南館1階坂田・平田ホール

時 間：13:00～18:00

対 象：一般

参 加 費：無料(意見交換会は1,500円)

第4回シンクロトン光研究センターシンポジウム

内 容：講演、光源加速器・名大ビームライン BL2S1の現状と整備予定、
放射光利用者懇談会総会



[問い合わせ先]

シンクロトン光研究センター
052-747-6562

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

1月23日(金)

場 所：環境総合館 1階レクチャーホール
 時 間：13:00～16:20
 定 員：60名
 対 象：本学学生および教員、一般
 参 加 費：無料

平成26年度重要文化財馬場家住宅研究センター研究交流会
 「開智学校のウチとソト」

講演題目：「学校の中を流れる時間－時間規律はどう作られたのか－」
 講 演 者：吉川卓治（教育発達科学研究科教授）
 講演題目：「学都松本へ－まちづくりとしての人づくり」
 講 演 者：齊藤金司氏（松本市教育委員長）
 講演題目：「学校建築のおもしろさ－擬洋風建築を中心に－」
 講 演 者：西澤泰彦（環境学研究科教授）
 内 容：学都・松本を象徴する開智学校に着目し、そこでの教育とそれを支えた施設を通して無形・有形の遺産を考え、学都・松本の魅力を再発見する

[問い合わせ先]

環境学研究科
 教授 西澤泰彦 052-789-3748

[展示「松本の重要文化財建造物とまちの魅力」]

場 所：中央図書館 2階ビブリオサロン（1/19～23）
 内 容：馬場家住宅をはじめとした松本市内に現存する重要文化財建造物や中心市街地の「まちの魅力」を紹介するパネル展示
 入 場 料：無料

1月24日(土)、25日(日)

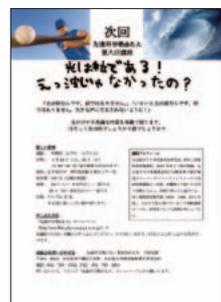
場 所：理学南館 1階セミナー室
 時 間：10:00～16:00
 定 員：各20名
 対 象：中学生以上、一般（1/24）、
 高校生以上、一般（1/25）
 参 加 費：500円（実験材料費）

第8回先進科学塾@名大

テ ー マ：「光は粒である！えっ波じゃなかったの？」
 講 師：林 照崇（理学研究科客員研究員）
 内 容：光が示す不思議な性質を実験で探ります。
 はたして光は粒でしょうか？波でしょうか？

[問い合わせ先]

エコトピア科学研究所
 教授 中村光廣 052-789-3532



1月24日(土)、3月14日(土)

場 所：博物館 2階展示室
 時 間：14:00～15:00
 参 加 費：無料

博物館コンサート NUMCo

「フラメンココンサート」(1/24)
 演奏曲目：「セビジャーナス・ブレリア」、他
 出 演：Jorge Millaqueo 氏 (Cante (唄))、
 木村彰人氏 (Toque (ギター))、
 長谷川智則氏 (サククス)、
 稲吉直子氏・内田好美氏・田中あや氏・
 西川正恵氏 (Baile (踊り))



「魅惑の歌声」(3/14)

演奏曲目：「ふるさとの四季」源田俊一郎、「ほうすけのひよこ」林 光、他
 出 演：井原義則氏 (テノール)、井原妙子氏 (ソプラノ)、栗 多香子氏 (ピアノ)

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

1月24日(土)

場 所：理農館 3階335号室
 時 間：10:00～15:30
 定 員：40名
 対 象：大学院生、ポスドク
 参 加 費：無料

ビジネス人材育成センター
 平成26年度後期 B 人セミナー

テ ー マ：「博士たちの自己分析・強み発見・仕事研究－『自己理解の促進』
 自分の強み・弱みを把握し、最高の状態にする方法を学ぶ－」

[問い合わせ先]

社会貢献人材育成本部
 ビジネス人材育成センター 052-747-6490



開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

1月27日(火)、28日(水)

場 所：野依記念学術交流館
時 間：9:55~17:20 (1/27)
10:00~16:00 (1/28)
対 象：一般
参 加 費：無料

(懇親会は学生：3,000円、
一般：5,000円)

第27回年代測定総合研究センターシンポジウム

講演題目：「古代の鉄の生産・流通」
講 演 者：丸山竜平氏 (元名古屋女子大学教授)
講演題目：「氷上花崗岩の形成年代は4.4億年か？ 3.5億年か？
—多様な年代測定値をどう解釈するか—」
講 演 者：鈴木和博 (本学名誉教授)



[問い合わせ先]

年代測定総合研究センター 052-789-2579

2月17日(火)~5月9日(土)

場 所：博物館 2階展示室
時 間：10:00~16:00
休 館 日：日・月曜日
入 場 料：無料

第30回博物館企画展「めだかの学校

—メダカ先生(山本時男)と名古屋大学のメダカ研究—

[関連特別講演会]

場 所：博物館 3階講義室
時 間：13:30~15:00
講演題目：「メダカ先生：山本時男備忘録と蓑虫山人」(2/28)
講 演 者：宗宮弘明 (本学名誉教授)
講演題目：「メダカ学最前線—日本が育てたモデル動物」(3/7)
講 演 者：成瀬 清氏 (基礎生物学研究所准教授)
参 加 費：無料



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

2月21日(土)、22日(日)

場 所：名古屋市科学館
(名古屋市中区) (2/21)、
蒲郡市生命の海科学館
(愛知県蒲郡市)、
三田石材 (愛知県西尾市) (2/22)
時 間：14:00~16:30 (2/21)、
9:00~16:00 (2/22)
定 員：30名
対 象：小学3年生以上、一般
(小学生は保護者同伴)
参 加 費：1,000円

名古屋市科学館共催事業 平成26年度第4回地球教室 「鉱物をさがそう！」

内 容：鉱物の性質について学習し、鉱物の採集と鑑定をする



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

3月3日(火)~6日(金)

場 所：理学南館 1階坂田・平田ホール
時 間：9:00~17:00

坂田記念 KMI ワークショップ

「質量の起源と強結合ゲージ理論 (SCGT15)」

[問い合わせ先]

素粒子宇宙起源研究機構
SCGT15@kmi.nagoya-u.ac.jp

名大トピックス No.260 平成27年1月16日発行

編集・発行/名古屋大学総務部広報渉外課

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報渉外課にお寄せください。

名古屋市千種区不老町 (〒464-8601)

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@adm.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ

(<http://www.nagoya-u.ac.jp/extra/topics/>) でもご覧いただけます。

表紙

ストックホルムコンサートホールで行われたノーベル賞授賞式の様子
(平成26年12月10日)



撮影：Alexander Mahmud
©Nobel Media AB

153 1989年の名古屋大学 — 青色LEDが実現した年 —

本誌本号でも報じられていますように、昨年12月にノーベル賞授賞式に臨んだ赤崎 勇特別教授と天野 浩教授のお二人が受賞対象となった青色発光ダイオード（青色LED）を実現したのは、1989（平成元）年のことでした。今回はその年の名大の様子を見てみましょう。

1989年10月当時、学部学生（研究生等を除く）と教養部学生（1・2年次）を合わせた数は8,628名でした。これは現在（2014年5月）の学部生9,926名より1,300名ほど少ない数ですが、男子はいずれも7,000名余りでほとんど変わっていません。つまり現在の学部生は、当時より女子1,300名分が増えていることになります。また大学院生（研究生等を除く）は、現在の5,138名に対し、当時は2,151名と半分以下でした。留学生の数（研究生等を含む）もまだ少なく、450名（1989年5月当時）と現在の4分の1程度でした。

1989年の名大ではどのような出来事があったのでしょうか。

まずこの年は創立50周年にあたり、早川幸男総長の下、記念式典などの諸行事が行われました。この年に『名古屋大学五十年史』の部局一、二が刊行されたのも、その記念事業の一環です。また、名大を主管校として開催された第28回国立七大学総合体育大会（七大戰、現在は全国七大学総合体育大会）において、名大が念願の初優勝を果たしました。

部局では、1961（昭和36）年に附置されていたプラズマ研究所が、文部省核融合科学研究所（現在は大学共同利用機関法人）に移行しました（学内にはプラズマ科学センターを設置）。そのほか、工学部では金属学科及び鉄鋼工学科を廃止して材料機能工学科及び材料プロセス工学科を設置し、理学部では附属諸施設を改組して附属地震火山観測地域センター（現在の大学院環境学研究科附属地震火山研究センター）を設置しました。また、総合保健体育科学センターでは、新体育館が竣工しています。



1	2	3
4	5	

1 1988年の工学部赤崎研究室記念写真（『1988名古屋大学卒業記念アルバム』より）。最前列中央が赤崎特別教授（当時教授）、最後列左から4番目が天野教授（この年の4月に大学院生から助手になった）。

- 1989年の東山キャンパス（『名古屋大学概要 平成元年度』より）。この年、日本では昭和から平成への改元、消費税（3%）施行、世界デザイン博（名古屋市）、海外では天安門事件、ベルリンの壁崩壊、マルタ会談などがあった。
- 第一理科系食堂（現在の Books & Cafe Fronte）の内景（1989年撮影）。
- 情報処理教育センター（現在の情報基盤センター）の端末室での講義（1989年撮影）。
- 鶴舞キャンパスの医学部正門（1989年撮影）。